

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第177集

へ き ほん ごう びー
日置本郷 B 遺跡

2012

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

日置本郷B遺跡の所在する愛知県愛西市は、平成17年4月1日に愛知県の西泉境を流れる木曾川左岸に位置する旧海部郡佐織町・佐屋町・八開村・立田村の二町二村が合併してできた市であり、古くから木曾川下流の水郷地帯である風土を活かした文化が営まれてきた地域であります。

今回調査しました日置本郷B遺跡は中世から続く日置八幡宮に隣接する遺跡であり、日置八幡宮には鎌倉時代の木造獅子頭をはじめとする文化財が伝えられており、毎年二月に執り行われる管粥神事は市の民俗無形文化財として貴重なものであります。今回の調査により、奈良時代の集落と中世の日置荘に関連すると思われる遺構・遺物が確認できたことは、平安時代後期に成立したとされる尾張国日置荘の成り立ちを考えるのみではなく、愛知県の尾張地域南西部の歴史を考える上でも貴重な成果を得ることができたものと思われまふ。本書の調査成果が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関する御理解を深める一助となれば幸いに思ひます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関の御理解と御協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成24年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 加藤 高明

例 言

- 1.本書は愛知県愛西市日置町本郷に所在する日置本郷B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2.調査は、県道富島津島線自転車歩行者道設置工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路維持課海部建設事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3.調査期間は平成21年12月から平成22年2月までで、1,100㎡の面積を行った。整理および報告書作成作業は平成23年4月から平成24年3月にかけて実施した。
- 4.調査担当者は、宮腰健司（本センター調査研究主任専門員）である。発掘調査は朝日軌洋株式会社の手助けを受けて実施した。
- 5.調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路維持課海部建設事務所、愛西市教育委員会、愛西市日置町自治会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
- 6.本書の編集は藍山誠一が担当したが、執筆は愛知県埋蔵文化財センターの宮腰健司（第2章）・鬼頭剛（付論の3・4-（1）・6-（1）・6-（3））・藍山誠一（第1章・第3章・第5章・付論の1・2・4-（2）・6-（2）・6-（3））と株式会社パレオ・ラボの中村健太郎（第4章A）・黒沼保子（第4章B）により分担した。また付論では愛西市教育委員会の石田泰弘氏に執筆の御協力を頂いた（付論の5）。
- 7.整理作業は藍山誠一が担当した。整理作業は伊藤あけみ・木下由貴子・小島裕子・鈴木好美・滝智美・時田典子・前田弘子・三浦里美・山田有美子（整理補助員）の協力を得て実施した。動物遺体の同定、木製品の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに、遺物の実測・トレース作業は株式会社イソソクに委託して実施した。また、写真撮影を写真工房遊（金子知久）に委託した。
- 8.本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
- 9.遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
- 10.写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24（0567-67-4161）
- 11.出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24（0567-67-4164）
- 12.本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けている。記して感謝したい。（五十音順・敬称略）
石田泰弘・愛西市文化財審議議員（平成21年12月24日に視察）・北村和宏・福岡猛志

目次

第1章	調査の概要	
	1. 調査の経緯と方法	1
	2. 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2章	遺構	
	1. 09A区	6
	2. 09B区	24
	3. 09C区	26
第3章	出土遺物	
	1. 土器・陶磁器	31
	2. 土製品	50
	3. 金属製品	52
	4. 石製品	54
	5. 木製品	54
第4章	自然科学分析	
	A. 日置本郷B遺跡の動物遺体同定	59
	B. 日置本郷B遺跡出土木製品の樹種同定	61
第5章	総括	
	1. 遺構の変遷	63
	2. 遺物の出土分布傾向	63
	3. 日置本郷B遺跡の特徴	66
付論		
	日置の古地理環境	67
写真図版	1～7 遺構、写真図版8～14 出土遺物	
抄録		

挿図・挿表目次

図1	日置本郷 B 遺跡位置図 ……………	1	図35	09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 2 ……	42
図2	日置本郷 B 遺跡調査区位置図 ……	2	図36	09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 3 ……	44
図3	日置本郷 B 遺跡周辺の遺跡 ……	4	図37	09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 1 ……	45
図4	09A 区遺構平面図 1 ……………	7	図38	09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 2、 09A 区その他包含層・表上出土 土器・陶磁器 1 ……………	46
図5	09A 区遺構平面図 2 ……………	8	図39	09A 区表上出土土器・陶磁器 2、 09Ba 区出土土器・陶磁器 ……	48
図6	09A 区遺構平面図 3 ……………	9	図40	09Bb 区・09Bc 区・09Ca 区～ 09Cc 区包含層出土土器・陶磁器 ……	49
図7	09A 区土層断面図 1 ……………	10	図41	09Cc 区・09Cf 区出土土器・陶磁器 ……	50
図8	09A 区土層断面図 2 ……………	11	図42	土鏝 ……………	51
図9	09A 区土層断面図 3 ……………	12	図43	陶丸 ……………	52
図10	09A 区土層断面図 4 ……………	13	図44	加工円盤 ……………	53
図11	09A 区土層断面図 5 ……………	14	図45	銅銭 ……………	54
図12	09Aa 区 001NR・002NR 遺構図 ……	15	図46	鉄製品など ……………	55
図13	09Aa 区 007SD・008SK 遺構図 ……	16	図47	鍛冶関連資料・剃削 ……………	56
図14	09Aa 区 014SK・015SK 遺構図 ……	17	図48	石製品 ……………	57
図15	09Ac 区 018SE・044SK 遺構図 1 ……	18	図49	木製品 ……………	58
図16	09Ac 区 018SE・044SK 遺構図 2 ……	19	図50	日置本郷 B 遺跡出土木製品の 光学顕微鏡写真 ……………	62
図17	09Ab 区 073SK・074SK・ 082SK・089SK 遺構図 ……………	19	図51	日置本郷 B 遺跡の遺構変遷 ……	64
図18	09Ab 区 054SK 遺構図 ……………	20	図52	日置本郷 B 遺跡の遺物出土分布 ……	65
図19	09Ab 区 095SB 遺構図 ……………	21	図53	愛西市日置町周辺の地籍図 ……	68
図20	09Ac 区 041SD・043SK 遺構図 ……	22	図54	愛西市日置町周辺の等高線図 ……	71
図21	09Ac 区 021SK・025SK・035SD・ 037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図 1 ……………	23	図55	地籍図と等高線図の対応関係 ……	74
図22	09Ac 区 021SK・025SK・035SD・ 037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図 2 ……………	24	図56	天明五己年天王川御馳渡御書請 已来之図 ……………	77
図23	09Ad 区 094SD・096NR 遺構図 ……	25	図57	日置の古地理環境想定図 ……	81
図24	09B 区遺構図 ……………	27	表1	周辺の遺跡一覧 ……………	5
図25	09C 区遺構図 1 ……………	28	表2	貝類と甲殻類一覧 ……………	59
図26	09C 区遺構図 2 ……………	29	表3	爬虫類・両生類・魚類・哺乳類一覧 ……	60
図27	09C 区遺構図 3 ……………	30	表4	樹種同定結果一覧 ……………	61
図28	09A 区遺構出土土器・陶磁器 1 ……	32			
図29	09A 区遺構出土土器・陶磁器 2 ……	33			
図30	09A 区遺構出土土器・陶磁器 3 ……	34			
図31	09A 区遺構出土土器・陶磁器 4、 09Aa 区包含層出土土器・陶磁器 1 ……	36			
図32	09Aa 区包含層出土土器・陶磁器 2、 09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 1 ……	38			
図33	09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 2 ……	39			
図34	09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 3、 09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 1 ……	40			

第1章 調査の概要

1. 調査の経緯と方法 (図1・図2)

日置本郷B遺跡は愛知県愛西市日置町本郷に所在する遺跡で、名古屋鉄道尾西線日比野駅より東300mの地点に位置する。本遺跡は旧佐屋町埋蔵文化財包蔵地一帯に日置本郷B遺跡(遺跡番号37005)として周知の遺跡として知られており、愛知県建設部道路維持課海部建設事務所による県道富島津島線自転車歩行者道設置に伴い、遺跡の事前調査をする必要性が認められた。そこで愛知県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査が平成20年9月に行われた結果、奈良時代から室町時代の遺構・遺物が全ての試掘調査地点において確認された。この為、県道富島津島線自転車歩行者道設置事業に先立って発掘調査が計画され、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが平成21年12月から平成22年2月の期間で、発掘調査を実施した。

調査面積は1,100㎡で、調査地点は日置八幡宮の西側の地点をA区、日置八幡宮の南側をB区・C区の大きく3ヶ所に分け、また発掘調査に伴う排土置場等の設置の為、A区を北からAa区～Ad区の4ヶ所(調査期間は平成21年12月～平成22年2月上旬)に、B区を北からBa区～Bc

区の3ヶ所(調査期間は平成22年2月中旬)に、C区をCa区～Cc区の3ヶ所(調査期間は平成22年2月中旬～下旬)に細分して調査を行った。発掘調査の終了後、平成23年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法はショベルカーにて表土となる旧水田埋立て土と旧水田耕作土、近世以後の造成土と思われる堆積を除去した後、発掘調査作業(人力による遺構検出・遺構検出状況の写真撮影・人力による遺構掘削・遺構の完掘状況の写真撮影・遺構の測量と観察・地元関係者への説明会など)を順次行い、作業終了次第埋め戻した。

遺跡の地元説明会は平成22年1月30日(土)に行い、90名の参加者を得た。

2. 遺跡の立地と歴史的環境

(図3・表1)

日置本郷B遺跡(5)の所在する愛知県愛西市は、濃尾平野を流れる木曾川の左岸にあり、木曾川により形成された沖積平野の三角州地帯にあり、日置本郷B遺跡のある海部郡南西部の愛西市南部(旧海部郡佐屋町から立田村)から弥富市にかけては三角州地帯の南縁部に位置する。さらに木曾川左岸になる尾張地域では、かつての木曾

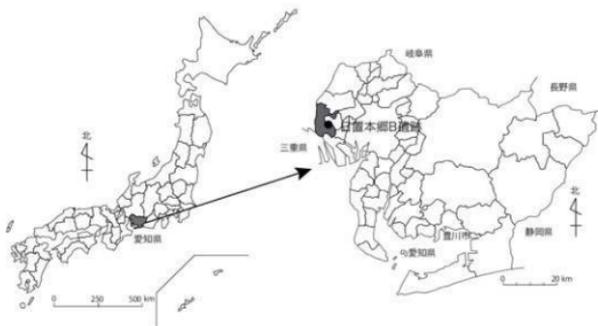


図1 日置本郷B遺跡位置図

日置本郷B遺跡

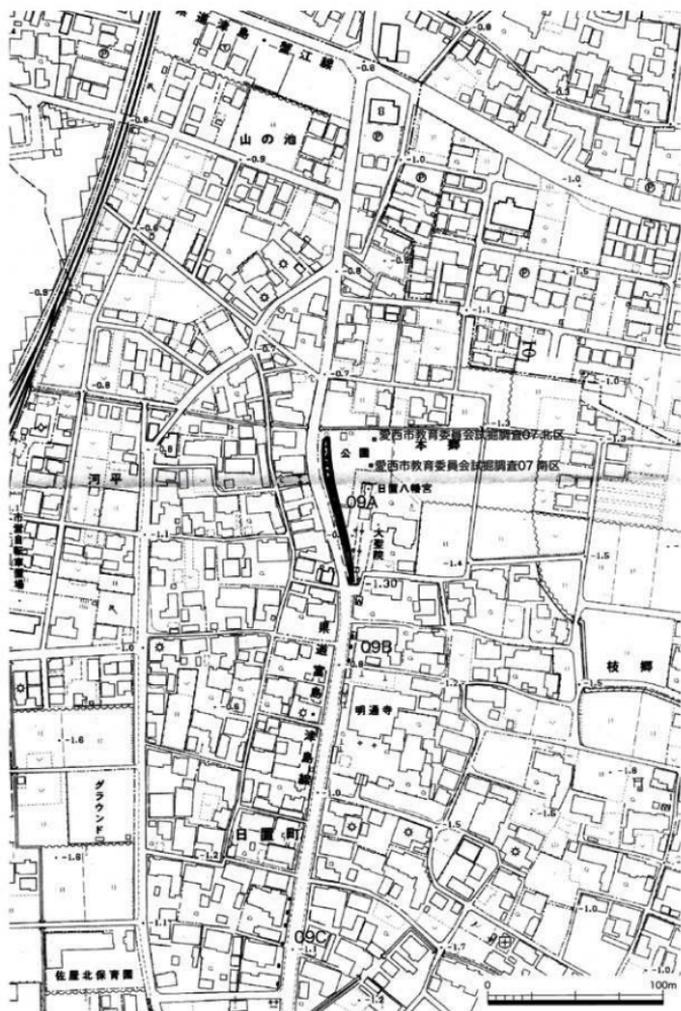


図2 日置本郷B遺跡調査区位置図 (1/2,500)

川支流である数多くの小河川が流下し自然堤防と後背湿地を形成しており、現在は愛西市南東部を津島市域から流れてくる善太川が北西から南東に流れて愛西市の南を画しており、海部郡蟹江町の南端にて日光川に合流して伊勢湾に注いでいる。また現在は廃川となっている佐屋川が愛西市北西部から日置本郷B遺跡の西1.75kmの地点を大正11年まで南に流れており、弥富市西部にて木曾川に合流していた。

次に、日置本郷B遺跡(第2図5、以下遺跡番号を付す)周辺の遺跡の形成時期を概観してみると、当遺跡周辺では縄文海進以後弥生時代に至るまでこの地域全体が海面下と考えられており、縄文時代以前の遺跡や遺物は確認されていない。

当遺跡周辺の地域において人間の活動が確認されるのは、愛西市南河田町にある弥生時代中期前葉の八重遺跡(73)で、少数であるが貝殻・施文の太頭壺形土器の口縁部が出土している。続く遺跡としては、津島市に所在する寺野遺跡(117)や宇治遺跡(119)が弥生時代中期中葉から中期後葉に営まれており、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけての遺跡としてS字状口縁台座壺形土器やパレススタイル土器などが出土した愛西市東西野遺跡(92)や多孔銅鏡が確認されている津島市埋田遺跡(132)が著名である。

古墳時代の遺跡では、三角縁神獣鏡が伝えられている奥津社古墳(67)、飾描き文様のある円筒埴輪が出土した諸桑遺跡(72)、二条の周溝に囲まれた円墳がみつかる川田遺跡(79)が存在する。特に川田遺跡では、発掘調査によって、5世紀の円筒形埴輪と形象埴輪、須恵器などが出土しており(愛知県埋蔵文化財センター2002)、形象埴輪には武人や巫女、馬など多様な形態のものがあり、古墳時代中期の文化がこの地域にも伝わり、乗馬等も営んだ首長が存在していたことがわかる。

つづく古代の遺跡は、日置本郷B遺跡周辺の愛西市日置町から柚木町や佐屋町にかけて濃密に分布しており、一つの遺跡群と捉えることが可能と思われる。同様な古代の遺跡群として稲沢市三宅廃寺(149)のある稲沢市南西部(旧中島郡平

和町南東部)からあま市美和町蜂須賀の一帯、北浦遺跡(68)や古御堂遺跡(69)のある愛西市千引町から先に述べた諸桑遺跡(72)のある愛西市諸桑町を経て埋田遺跡(132)のある津島市埋田町にかけての一帯、稲沢市尾張国分寺と同範の軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦が指摘されている潤高廃寺(91)のある愛西市西川端町周辺の一帯、観音町A遺跡(129)のある津島市観音町から愛西市町方町の一帯なども、古代の遺跡が集中して分布しており、地域的まとまりが存在していた可能性が考えられる。また潤高廃寺と同じく尾張国分寺と同範関係を持つ軒瓦が出土している宗玄坊廃寺(62)が愛西市宮地町にて確認されており、遺跡の究明が待たれる。

中世では、古代の遺跡よりさらに遺跡が増加し、古代の遺跡とほぼ重なる地点とともに津島市本町周辺の津島神社の門前町につながる遺跡群の存在や愛西市南部の西保町・東保町・西條町・東條町・大井町の東西約4kmにわたる遺跡群が認められるようになる。本格的な発掘調査が待たれるところであるが、中世の遺跡群は日置荘や櫻江荘をはじめとする荘園や地名に残る中世国衙領としての保などの存在を反映している可能性があるものである。また、現在は木曾川河床になっている地点において、高細水没遺跡や日原水没遺跡などが存在する。

当遺跡周辺は、日置八幡宮所蔵の懸仏に残る紀年銘より尾張国日置荘との関係が深い遺跡と考えられ、また近世には佐屋街道が遺跡の西方を通っていた可能性が高い。なお、日置八幡宮には先に述べた中世の懸仏や木造獅子頭が所蔵されている。

日置本郷B遺跡



図3 日置本郷B遺跡周辺の遺跡 (1/50,000)

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	山の寺遺跡	古墳	78	八軒遺跡	古墳-鎌倉
2	日置八幡社遺跡	鎌倉-古代-近世	79	川田遺跡	平安-鎌倉
3	中田遺跡	中世-近世	80	新田遺跡	平安-近世
4	野末郷土館遺跡	古代-近世	81	山崎遺跡	古墳
5	日置本陣遺跡	中世	82	土舞野遺跡	古墳-近世
6	河平遺跡	中世-近世	83	輪島遺跡	古墳
7	八百歩遺跡	古代-中世	84	森野遺跡	古墳
8	上川田遺跡	中世-近世	85	鎌ヶ丘古墳	古墳
9	上川田遺跡	遺跡	86	久保遺跡	古墳-平安
10	二所遺跡	遺跡	87	津留遺跡	古墳-平安
11	二所遺跡	中世	88	山崎遺跡	古墳
12	新井田遺跡	古代-中世	89	山崎遺跡	古墳-鎌倉
13	白山遺跡	中世	90	川原前遺跡	古墳
14	新井田遺跡	中世	91	新井田中	古墳
15	稲葉本陣遺跡	中世-近世	92	東西野遺跡	古墳-近世
16	西三郎遺跡	遺跡	93	大塚遺跡	古代-中世
17	松原遺跡	古代-中世	94	戸部-野崎遺跡	古墳-中世
18	五ヶ丘遺跡	中世	95	西崎北山遺跡	古墳-中世
19	内中野遺跡	古代-中世	96	中野遺跡	古墳-中世
20	納山遺跡	古墳-中世	97	西崎口遺跡	古墳-中世
21	納山遺跡	古代-中世	98	西崎-志ノ原遺跡	古墳-中世
22	尾原遺跡	古代-中世	99	渡口遺跡	古墳-近世
23	尾原遺跡	古代-中世	100	中村-津波遺跡	古墳-中世
24	河原遺跡	中世	101	中村-西出遺跡	古墳-中世
25	尾原遺跡	遺跡	102	西出遺跡	古代-中世
26	尾原遺跡	中世-近世	103	尾原後遺跡	古代-中世
27	尾原遺跡	中世-近世	104	宮野遺跡	古代-中世
28	尾原遺跡	中世-近世	105	渡口遺跡	古代-中世
29	尾原遺跡	遺跡	106	大辻遺跡	古墳-中世
30	尾原遺跡	古代	107	渡野遺跡	古墳-中世
31	尾原遺跡	中世-近世	108	尾原遺跡	古代-中世
32	尾原遺跡	中世-近世	109	尾原遺跡	中世
33	尾原遺跡	中世-近世	110	大津遺跡	古墳-鎌倉
34	尾原遺跡	中世	111	下郷古遺跡	古墳
35	尾原遺跡	中世-近世	112	尾原遺跡	古墳-近世
36	尾原遺跡	中世-近世	113	尾原遺跡	古墳-近世
37	尾原遺跡	中世-近世	114	尾原遺跡	古墳-近世
38	尾原遺跡	中世-近世	115	尾原遺跡	古墳-近世
39	尾原遺跡	中世-近世	116	尾原遺跡	古墳-近世
40	尾原遺跡	中世-近世	117	尾原遺跡	古墳-近世
41	尾原遺跡	中世-近世	118	尾原遺跡	古墳-近世
42	尾原遺跡	中世-近世	119	尾原遺跡	古墳-近世
43	尾原遺跡	中世-近世	120	尾原遺跡	古墳-近世
44	尾原遺跡	中世-近世	121	尾原遺跡	古墳-近世
45	尾原遺跡	中世-近世	122	尾原遺跡	古墳-近世
46	尾原遺跡	中世-近世	123	尾原遺跡	古墳-近世
47	尾原遺跡	中世	124	尾原遺跡	古墳-近世
48	尾原遺跡	中世	125	尾原遺跡	古墳-近世
49	尾原遺跡	中世	126	尾原遺跡	古墳
50	尾原遺跡	中世-近世	127	尾原遺跡	古墳-近世
51	尾原遺跡	遺跡	128	尾原遺跡	古墳-近世
52	尾原遺跡	中世	129	尾原遺跡	古墳
53	尾原遺跡	遺跡	130	尾原遺跡	平安-鎌倉
54	尾原遺跡	遺跡	131	尾原遺跡	鎌倉
55	尾原遺跡	中世-近世	132	尾原遺跡	古墳-鎌倉
56	尾原遺跡	中世-近世	133	尾原遺跡	鎌倉-近世
57	尾原遺跡	中世-近世	134	尾原遺跡	古墳-近世
58	尾原遺跡	中世-近世	135	尾原遺跡	鎌倉-近世
59	尾原遺跡	中世-近世	136	尾原遺跡	古墳-中世
60	尾原遺跡	中世	137	尾原遺跡	中世-近世
61	尾原遺跡	古墳	138	尾原遺跡	中世-近世
62	尾原遺跡	古代	139	尾原遺跡	中世
63	尾原遺跡	平安-鎌倉	140	尾原遺跡	中世
64	尾原遺跡	平安	141	尾原遺跡	中世
65	尾原遺跡	平安-鎌倉	142	尾原遺跡	古墳
66	尾原遺跡	古墳-平安	143	尾原遺跡	古墳-中世
67	尾原遺跡	古墳	144	尾原遺跡	古代-中世
68	尾原遺跡	古墳-近世	145	尾原遺跡	中世
69	尾原遺跡	平安	146	尾原遺跡	古代-中世
70	尾原遺跡	古墳	147	尾原遺跡	中世
71	尾原遺跡	古墳-平安	148	尾原遺跡	古代-中世
72	尾原遺跡	古墳-鎌倉	149	尾原遺跡	古墳
73	尾原遺跡	古墳-鎌倉	150	尾原遺跡	古墳-中世
74	尾原遺跡	古墳	151	尾原遺跡	古代
75	尾原遺跡	平安	152	尾原遺跡	古墳
76	尾原遺跡	平安	153	尾原遺跡	古墳
77	尾原遺跡	平安-鎌倉			

<参考文献>

吉田富夫 1968 『津島市埋田遺跡発掘調査報告』津島市史編纂委員会

伊藤英雄 1970.3 『寺野遺跡』津島市史資料編1』津島市教育委員会

岩野見司 1976.9 『愛知県海部郡佐織町奥津社の三角縁神暇鏡について』『考古学雑誌 62-2』

岩野見司・服部元之 1987 『第6編考古』

『佐織町史』資料編2、佐織町役場

佐織町史編さん委員会 1987 『佐織町史』通史編、佐織町役場

赤塚次郎他 1991.6 『寺野遺跡の出土遺物について』『考古学フォーラム2』愛知県考古学談話会

服部元之 1996 『第7編考古』『八開村史』資料編2、八開村役場

服部元之 1996 『第二章考古』『佐屋町史』通史編、佐屋町史編纂委員会

木川正夫・藤山誠一他 2002 『川田遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第103集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

藤山誠一 2008 『愛知県日置八幡宮所蔵木造獅子頭考』『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号、愛知県埋蔵文化財センター

第2章 遺構

1. 09A区

09A区は日置八幡宮の西側に設けられた、東西幅約6m、南北長約100mの細長い調査区である。調査は自動車等の進入路と廃土処理の関係から、Aa・Ab・Ac・Adの4区に分けて行った。旧地形は、Ab区からAc区にかけては微高地部に、Aa区の北から西側と、Ac区南半からAd区は低地部となる。微高地部分の基本層序は、上位より表土—黒(暗)褐色砂質シルト—黄褐色シルト—黒褐色砂質シルト—暗灰色砂質シルト—黄褐色シルト質中粒砂(基盤)で、黒褐色砂質シルト層に古代から中世の遺物が含まれる。この包含層である黒褐色砂質シルト層は概ね上下2層に区別されるが、明瞭な時期差は確認できなかった。遺構は標高-180~-200cmの黒褐色砂質シルト層下位及び基盤上面で検出している(図4~図11)。

(1) 09Aa区

001NR・002NR 001NRは灰オリーブ色中粒砂を、002NRは黒褐色砂質シルトを埋土とする落ち込み、両遺構とも低地部の屑に堆積した一連の埋土で、北側を流れる水路の旧流路に切られている。001NRが中世後半期から江戸時代、002NRが中世後半期になる(図12)。

003SK 黒褐色砂質シルトを埋土とする隅丸方形を呈する土坑で、長径100cm、短径81cm、深さ17cmを測る。山茶碗の碗・小皿片、灰軸陶器片が上位・下位の区別無く出土している(写真図版2)。時期は中世後半期と思われる。

005SK 003SKと同様に黒褐色砂質シルトを埋土とする隅丸方形の土坑で、長径102cm、短径85cm、深さ18cmを測る。極めて脆い骨小片が上位から中位にかけて出土している。平面形は基盤面において検出したが、骨片の出土高をみると、黒褐色砂質シルト層内に埋蔵があると推定される(写真図版2)。時期は中世後半期と思われる。

006SK 暗オリーブ褐色砂質シルトを埋土とする、長径26cm、短径25cm、深さ25cmの円形を呈する土坑で、上位で焼土塊が出土している。

007SDに切られる。

007SD 幅118cm、深さ12cmを測り、断面が逆台形を呈する。須器土・土師器焼が出土する(図13)。

008SK 埋土を観察すると、オリーブ黒色砂質シルトを切るように黒褐色砂質シルトが堆積しており、2基の土坑が重なっている可能性がある。黒褐色砂質シルトの最上位で、14世紀中頃の完形に近い北部系陶器の小皿(図28-43)が出土している(図13)。

014SK・015SK 包含層である黒褐色砂質シルト層を掘削中に銅銭が出土したが、地点を確認することはできなかった。その後周囲を精査したところ、014SKの南東部1/2と、その下位で015SKを検出した。014SKは長径135cm、短径120cm、深さ15cmの円形または隅丸方形を呈する土坑。015SKは長径158cm、短径135cm、深さ37cmの隅丸方形を呈する土坑で、015SK上位よりひとかたまりの状態でもM01~M10の10枚の銅銭が出土している。また黒褐色砂質シルト層を掘削中に出土した12枚の銅銭(図45-M11~M22)については、上部の014SKに所属する可能性が高い(図14・写真図版2)。時期は中世前半期か。

(2) 09Ab区

054SK 長径384cmを測る大型の土坑。底面には激しい凹凸があり、掘り込み面からみると、近代以降の遺構と考えられる(図18)。

095SB 061SK・062SK・063SK・066SK・077SK・078SKで構成される南北2間×東西2間以上の掘立柱建物で、柱間は南北が約150cm、東西が約135cmとなる。柱穴は径23~44cm、深さ17~31cmを測り、061SK・063SK・066SKでは断面の観察で柱痕が確認されている。またやや位置がずれる055SKをこの建物の柱穴とすると、総柱の掘立柱建物になる可能性も考えられる(図19・写真図版3)。時期は063SK出土の北部系陶器の山茶碗を考えると、14世紀後

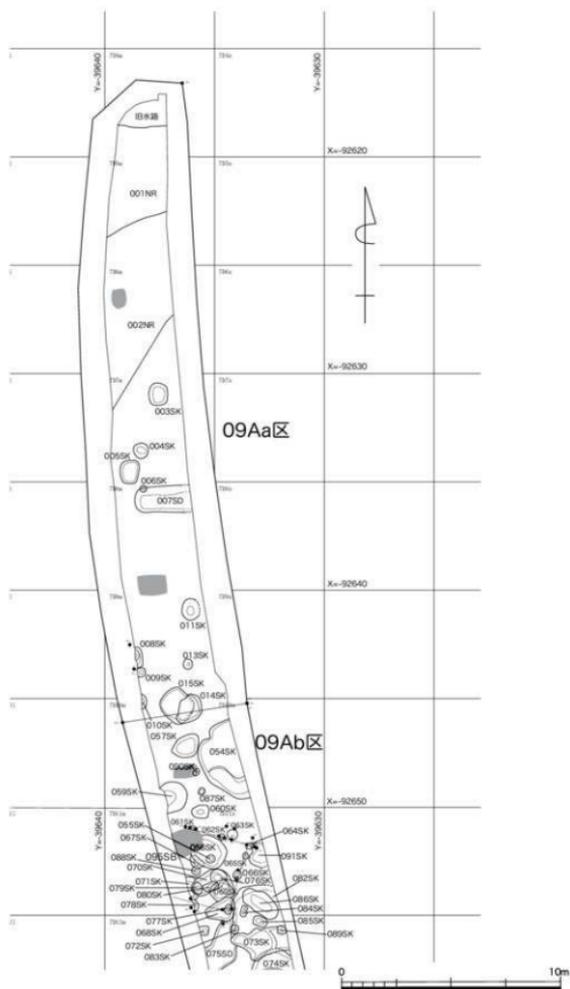


図4 09A区遺構平面図1 (1/200)

日置本郷B遺跡

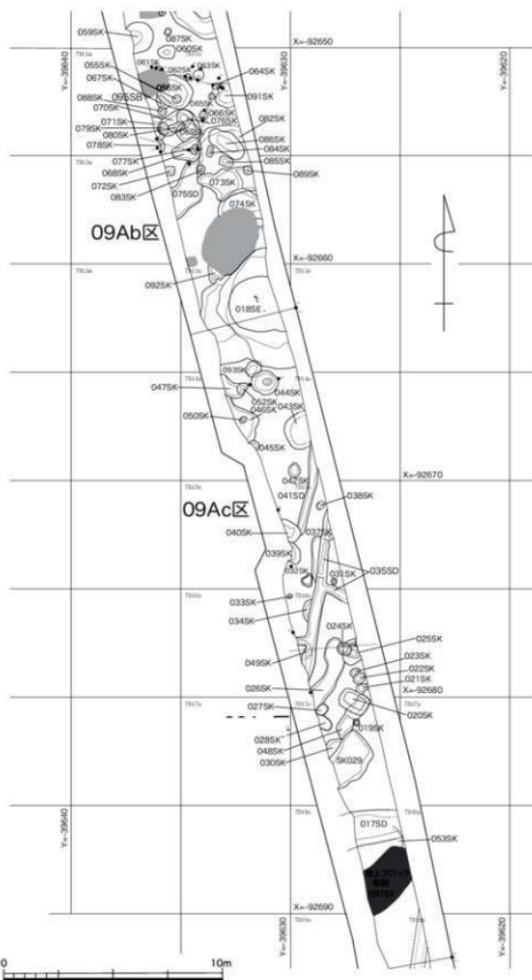


図5 O9A区遺構平面図2 (1/200)

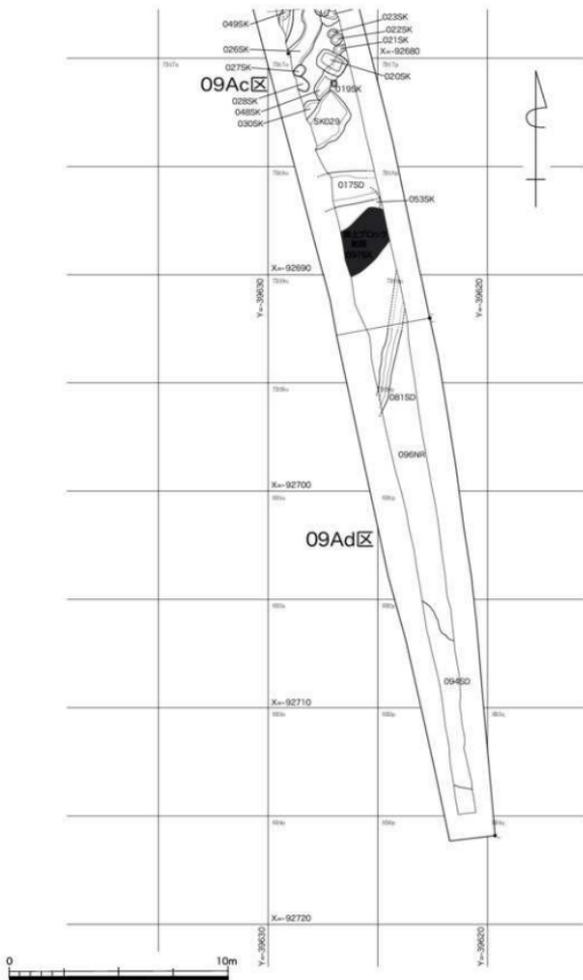


図6 09A区遺構平面図3 (1/200)

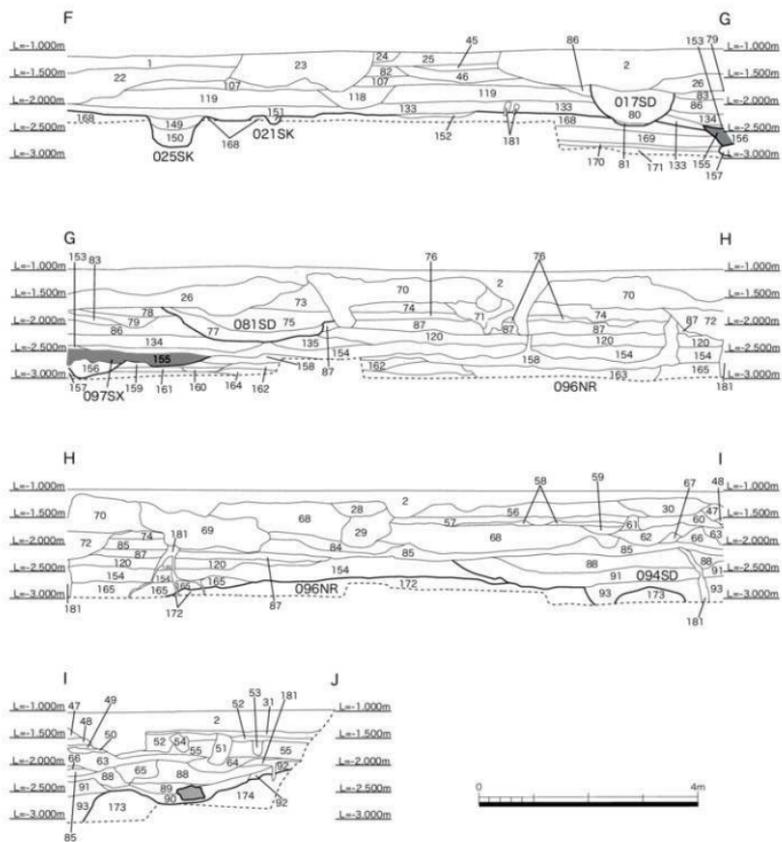


図8 O9A区土層断面図2 (1/80)

日置本郷 B 遺跡

1. 砕石コンクリートガラ(整地土)
2. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物,ゴミを含む
3. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトに10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルトを多く含む。(前の神社の宅跡)レンガを含む。
4. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトにコンクリートガラを含む。(神社の基礎)
5. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰褐色砂質(中粒)シルトを多く含む。
6. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト
7. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
8. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
9. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの混土
11. 2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトの混土
12. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの混土
13. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトを多く含む。
14. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
15. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの混土
16. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分のブロックを多く含む。
18. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト(水道管の周り方)
19. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(水道管の周り方)
20. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを多く含む
21. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
22. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
23. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物,ゴミを含む
24. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 5cm次の円礫を夾層
25. 10YR3/4 暗褐色砂質(中粒)シルト 砕石を部分的に含む(整地土)
26. 10YR3/2 暗褐色砂質(中粒)シルト
27. 10YR3/2 暗褐色砂質(中粒)シルト
28. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
29. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
30. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 5cm次の礫を多く含む
31. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
32. 10YR4/4褐色砂質(中粒)シルトにコンクリートガラを含む(神社の基礎)
33. 10YR5/6黄褐色砂質(中粒)シルトに10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルトを少量含む。
34. 10YR5/6黄褐色砂質(中粒)シルト
35. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
36. 10YR5/6黄褐色砂質(中粒)シルトに10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルトを少量含む。
37. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色(中粒)シルト
38. 5Y4/1灰色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
39. 5Y5/1灰色シルト質(中粒)砂 酸化鉄分を多く含む。
40. 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト
41. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色(中粒)シルト
42. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト
43. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
44. 2.5Y4/3オリーブ褐色(中粒)シルト
45. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 瓦片を多く含む
46. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
47. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
48. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトの混土
49. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
50. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
51. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 2.5Y3/2黒褐色シルトブロックを少量含む
52. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト, 2.5Y3/2黒褐色シルトのブロックを多く含む 貝を多く含む
53. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
54. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y6/4にぶい黄褐色中粒砂ブロックを含む
55. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 縦3cm程の転圧されたシルト層が4層水平に連続 遺跡あとか?
56. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
57. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
58. 2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルト
59. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む
60. 10YR4/3 灰黄褐色砂質(中粒)シルト
61. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
62. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトブロックを含む
63. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト, 2.5Y3/2黒褐色シルトのブロックを多く含む
64. 2.5Y4/2 暗灰褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの混土
65. 2.5Y4/2 暗灰褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの混土
66. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
67. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
68. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む
69. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む
70. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト

図9 09A 区土層断面図3 (1/80)

71. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト
 72. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 73. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分少量含む
 74. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 75. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
 76. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 77. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
 78. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質(中粒)シルト
 79. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックを多く含む
 80. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト 瓦片を含む
 81. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに5Y3/1 オリーブ黒色シルトブロックを少量含む
 82. 10YR4/3 に近い黄褐色(中粒)シルト
 83. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む
 84. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
 85. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
 86. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 近世陶器を含む
 87. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに炭化物を含む
 88. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
 89. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルトの混土
 90. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
 91. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
 92. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(鉄分硬化)
 93. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト 木質を多く含む
 94. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
 95. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 96. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
 97. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
 98. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
 99. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
 100. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
 101. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
 102. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
 103. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルトに5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を含む
 104. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色中粒砂の混土
 105. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分を多く含む
 106. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 107. 10YR4/3 に近い黄褐色(中粒)シルト
 108. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 109. 5Y5/2灰オリーブ色(中粒)砂 酸化鉄分を多く含む。
 110. 2.5Y4/2暗黄褐色(中粒)シルト
 111. 2.5Y4/1 黄褐色砂質(中粒)シルト
 112. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
 113. 2.5Y4/2暗黄褐色(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
 114. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
 115. 10YR4/3に近い黄褐色砂質(中粒)シルト
 116. 10YR3/4暗褐色砂質(中粒)シルト2.5Y4/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。
 117. 5Y5/2灰オリーブ色(中粒)砂 酸化鉄分を含む。
 118. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 119. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
 120. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
 121. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
 122. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む 包含層上で遺物を取り上げ
 123. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトに5Y3/1オリーブ褐色砂質(中粒)シルトを多く含む
 124. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトに5Y3/1オリーブ褐色砂質(中粒)シルトを含む
 125. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
 126. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 127. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
 128. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
 129. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
 130. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 131. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
 132. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色シルト質中粒砂の混土
 133. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
 134. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 包含層として遺物を取り上げAa区から続く包含層と同一層であるかは不明
 135. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 包含層として遺物を取り上げ
 136. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む。
 137. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
 138. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色砂質(中粒)シルトの混土
 139. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色砂質(中粒)シルトの混土
 140. 2.5Y4/1 黄褐色砂質(中粒)シルト

図 10 09A 区土層断面図 4 (1/80)

日置本郷 B 遺跡

141. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
142. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルトを含む
143. 5Y4/1 灰色シルト質中粒砂に5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトブロックを少量含む
144. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 5Y6/1 灰色シルト質中粒砂を含む
145. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質中粒砂
146. 2.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
147. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
148. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト
149. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
150. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
151. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
152. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
153. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトと5Y4/3 暗オリーブ色シルトの混土
154. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト シルト質多く硬くしまる 包含層2として遺物を取り上げ
155. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 洗土ブロック、炭化物を多く含む 包含層3で遺物を取り上げ 平面図に認めあり、Det.017, Det.018出土
156. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色シルトと5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂を含む 包含層3として取り上げ
157. 2.5Y5/4 黄褐色シルトと5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂の混土
158. 7.5Y5/1 灰色シルト質中粒砂 包含層4として遺物を取り上げ
159. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 包含層4として遺物を取り上げ
160. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの混土 酸化鉄分を多く含む 包含層4として遺物を取り上げ
161. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの混土 包含層4として遺物を取り上げ
162. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの混土 包含層4として遺物を取り上げ
163. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
164. 7.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 包含層4として遺物を取り上げ
165. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む 包含層2として遺物を取り上げ
166. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト
167. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質中粒砂(基礎層)
168. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基礎層)
169. 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂(基礎層)
170. 2.5Y5/4 黄褐色シルト 硬くしまる(基礎層)
171. 5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂(基礎層)
172. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基礎層)
173. 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂(基礎層)
174. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂(基礎層)
175. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分, 2.5Y5/4 黄褐色中粒砂のブロックを少量含む(礫砂)
176. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む, 5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を織り込む。(礫砂)
177. 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(礫砂)
178. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂を少量含む
179. 7.5Y3/1 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと5Y7/4浅黄褐色中粒砂の混土
180. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂を少量含む
181. 2.5Y3/3 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(礫砂)

図 11 O9A 区土層断面図 5 (1/80)

半から 15 世紀と考えられる。

095SB 付近では、056SK・070SK・073SK・074SK・075SK・082SK・086SK・091SK など長径 100～200cm、深さ 20～30cm を測る楕円形または不定形な大型土坑連続して掘削されている。遺構の性格は不明であるが、時期は 096SB とほぼ同時期の遺構群とみることができ、074SK からは大窩期にかかる重櫛皿(図 31-153)が出土している。068SK は近世か(図 17)。(3) Ac 区

017SD 南側に落ち込む微高地の肩部分に東西に走る幅 165cm、深さ 70cm の溝。時期は 18 世紀後半。

018SE Ac 区調査段階で南半部が確認されていたが、上部のみ掘削するにどめ Ab 区調査時に改めて全形を検出し掘削した。018SE は検出段

階で、南北 573cm、東西 363cm、深さ 80cm を測る大型の井戸で、断面観察では径約 180cm を測る井戸枠の掘り込みが確認されるが、噴砂痕のためか平面でははっきりしなかった。底面を-270cm まで掘削して写真撮影・測量を行った後、重機によってさらに下位まで掘り下げたところ、-303～-314cm の高さで木組みの井戸枠上端が確認された。その時点で湧水が激しくなったため、更なる掘削は断念し、木組みの一部(図 49-W01～W05)のみを取り上げた(図 15-写真図版 5)。時期は 14 世紀後半～15 世紀。

020SK 長径 130cm、短径 92cm、深さ 28cm を測る隅丸方形を呈する土坑。須恵器・灰釉陶器・清郷型鍋が出土する。

025SK・049SK 02SSK は南北 104cm、深さ 55cm の土坑で、上位で長径 41cm、短径

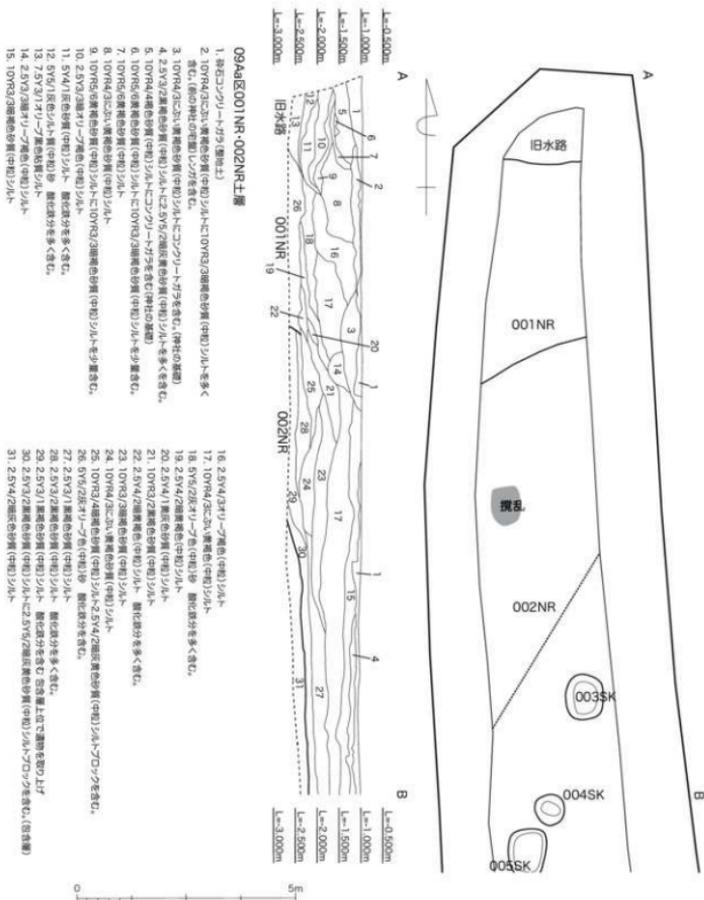


図 12 09Aa 区 001NR・002NR 遺構図 (1/100)

日置本郷B遺跡

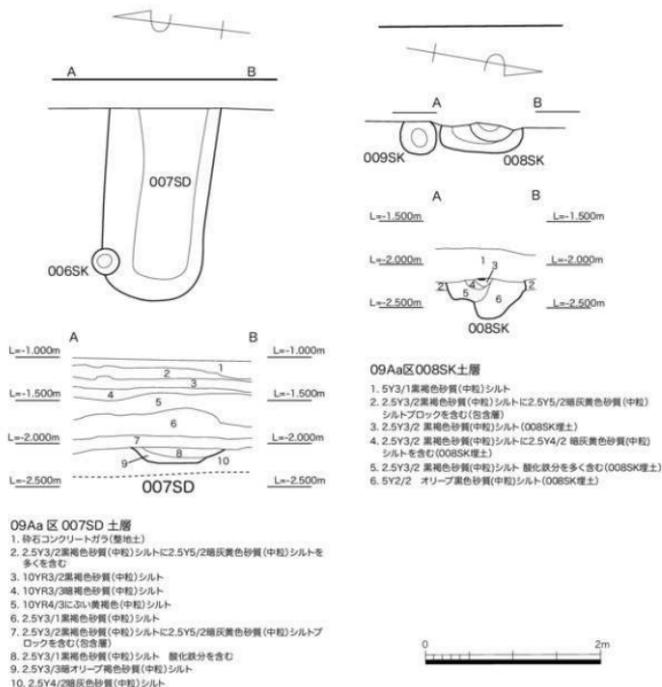


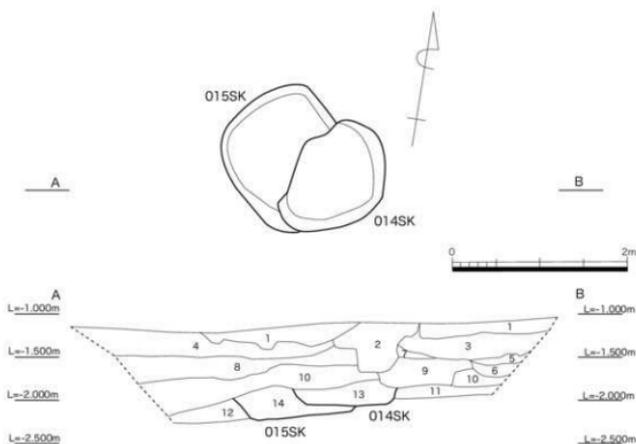
図13 O9Aa区 O07SD・O08SK 遺構図 (1/50)

30.5cm、厚さ19.5cmの砂岩礫を検出した。礫は部分的に割れた状態で、加工痕は確認できなかったが、被熱している。さらにその横や直下で、4点の砂岩小礫も出土している(長径12×短径11.5×厚さ6cm、長径11×短径8×厚さ6.5cm、長径11×短径7×厚さ3.5cm、長径10×短径7×厚さ5cm)。これらの礫も被熱しているので大型のものと同一と思われるが、確実な接合面は見つからなかった(写真図版4)。被熱痕は石表面だけではなく破面にも認められる。時期は9～10世紀。O49SKはO25SKから西へ235cmのところであり、O35・O36SDに切られる。大

きさは東西約90cm、深さは断面観察で73cmを測る。灰軸陶器と製塩土器脚部が出土する(図21・図22)。

O39SK・O40SK 両土坑とも径100cm、深さ50cmを越える大型土坑で、O41SD—O40SK—O39SKの順に掘削されている。北部系陶器の山茶碗が出土することから、時期は14世紀後半と考えられる(図21)。

O35SD 検出時点では南部のO35SDと北部のO36SDに区分していたが、最終的には結合することが確認されたため名称をO35SDに統一した。幅約50cm、深さ20～30cmで、北にいくに従



09Aa区014SK・015SK土層

1. 砕石コンクリートガラ(堅地土)
2. 2.5Y3/2黄褐色砂質(中粒)シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトの混土
3. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
4. 2.5Y3/2黄褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトを多く含む。
5. 10YR3/3黄褐色砂質(中粒)シルト
6. 10YR3/2黄褐色砂質(中粒)シルト
7. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
8. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
9. 10YR3/2黄褐色砂質(中粒)シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトの混土
10. 2.5Y3/1黄褐色砂質(中粒)シルト
11. 2.5Y3/2黄褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
12. 2.5Y3/2黄褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む 11層と同一層であるかもしれない 包含層下位として遺物を取り上げ
13. 2.5Y3/2黄褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロック、酸化鉄分を多く含む
14. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分、2.5Y3/2黄褐色砂質(中粒)シルトブロックを多く含む

図14 09Aa区014SK・015SK遺構図(1/50)

いゆるやかに深くなっている。溝は北北東—南南西方向に走り、中央部で東に、南部で西に分岐する(図21)。時期は中世後半期。

041SD 035SDと約75cmの間隔をあけて平行して走る、幅40cm、深さ10cmの溝。山茶碗片や軒平瓦が出土している(図20)。時期は中世後半期。

044SK 径約120cm、深さ10cmを測る円形の土坑で、中央やや東寄りの底面に径約35cm、深さ20cmの土坑がある。中央部分の土坑は、後から掘削されたか、柱の抜き痕の可能性はある(図15)。時期は14世紀。

(4) 09Ad区(図6・図8・図23・写真図版5)

081SD 北北東—南南西方向に走る、幅63cm、深さ15cmの溝。Ac区調査時点では表土と誤認し掘削したが、Ad区調査で溝遺構と認識した。18世紀後半の陶磁器が出土する。

094SD 壁面の土層観察で確認された落ち込み。溝番号SDを付けたが、大型の土坑になる可能性もある。底面にはかなり大きな凹凸があり、灰色砂質シルト(包含層2)を切り込む。時期は近世後期。

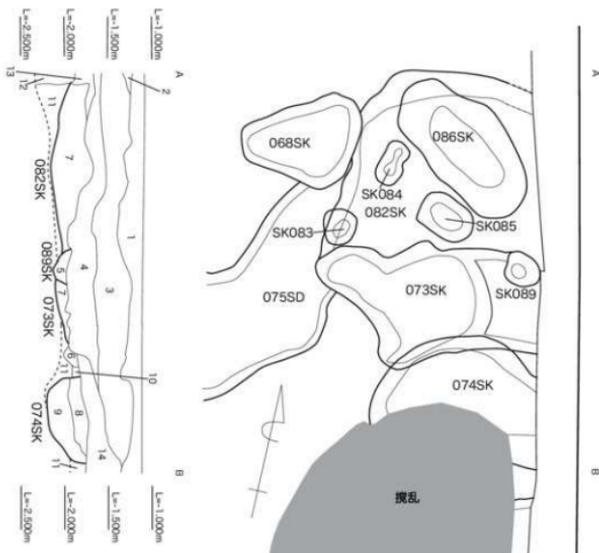
096NR・097SX Ac区南部からAd区にかけて広がる落ち込み。北肩部は017SDでやや急に

09Ab区018SE土層

1. 砕石コンクリートガラ(埋土)
2. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/2 黄褐色砂質(中粒)シルト
6. 2.5Y3/2 黄褐色砂質(中粒)シルト
7. 5Y2/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
8. 5Y3/1 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
9. 7.5Y3/1 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
10. 5Y2/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
12. 5Y4/1 灰黄色砂質(中粒)シルトに5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を含む

13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色中粒砂の混土
14. 5Y3/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分を多く含む
15. 10YR4/3に近い黄褐色(中粒)シルト
16. 2.5Y3/1 黄褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y3/2 黄褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
18. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質(中粒)シルト
19. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質中粒砂(基盤層)
20. 5Y3/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分、2.5Y5/4 黄褐色中粒砂のブロックを少量含む(礫砂)
21. 5Y2/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む、5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を混状に含む。(礫砂)

図 16 09Ac 区 018SE・044SK 遺構図 2 (1/50)

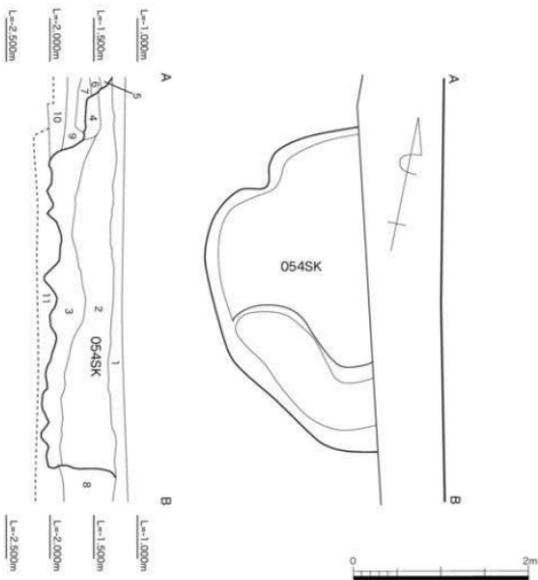


09Ab区073SK・074SK・082SK・089SK土層

1. 砕石コンクリートガラ(埋土)
2. 7.5Y3/1 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト(米通管の跡の方)
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを多く含む
4. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
7. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
9. 2.5Y3/2 黄褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y3/2 黄褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
12. 2.5Y7/4 淡黄褐色中粒砂(礫砂)
13. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y7/4 淡黄褐色中粒砂を少量含む
14. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト

図 17 09Ab 区 073SK・074SK・082SK・089SK 遺構図 (1/50)

日置本郷B遺跡



09Ab区054SK土層

1. 砕石コンクリートガラ(層地土)
2. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト 腐化部分を多く含む。
3. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
4. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの混土
6. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトを多く含む。
7. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
9. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
11. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト

図 18 09Ab区054SK 遺構図 (1/50)

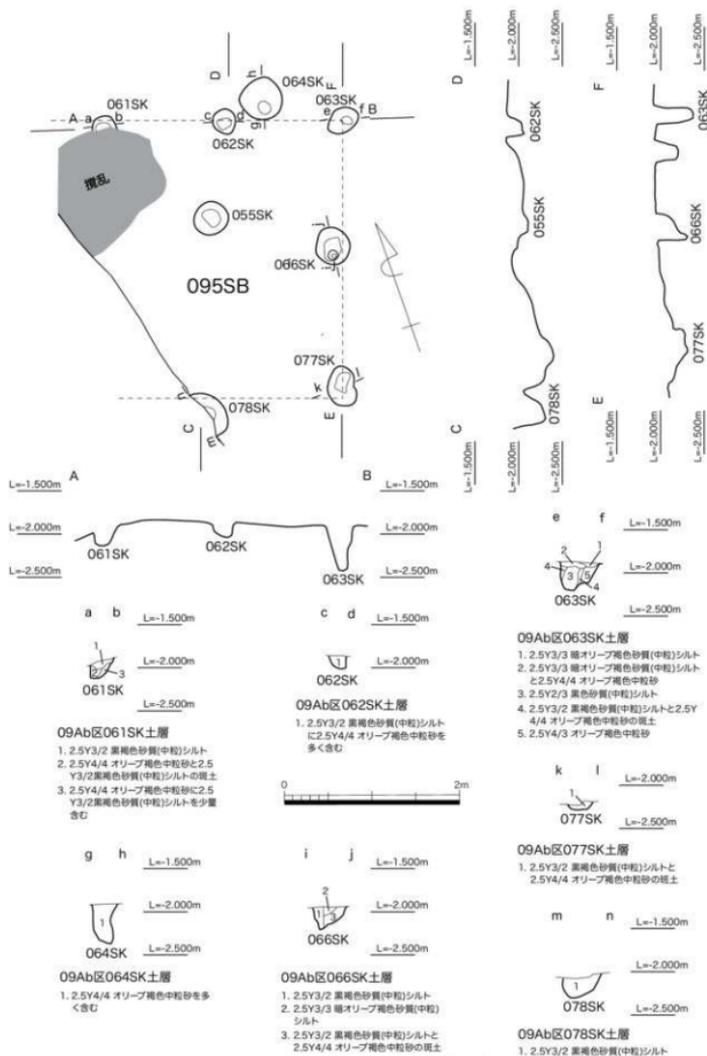


図 19 09Ab区 095SB 遺構図 (1/50)

日置本郷B遺跡

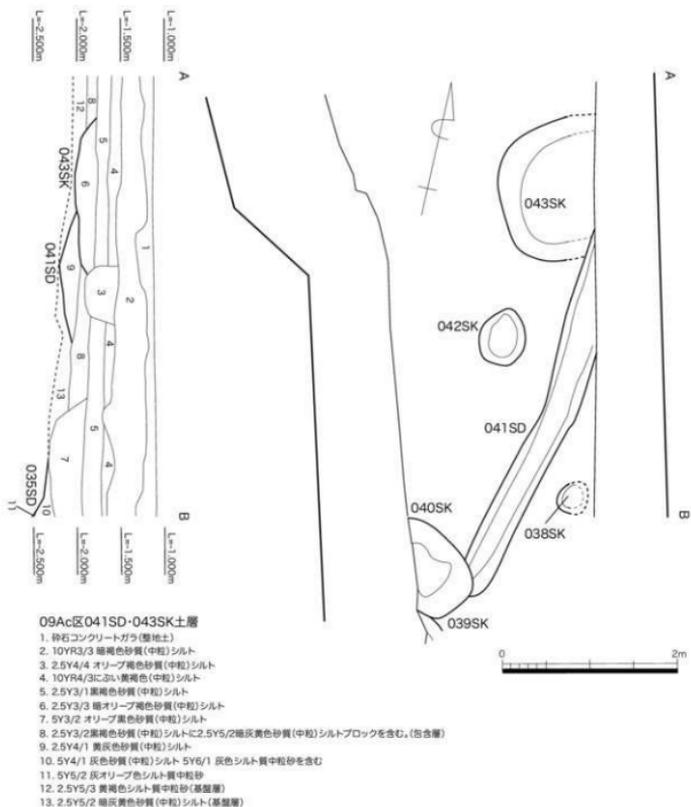
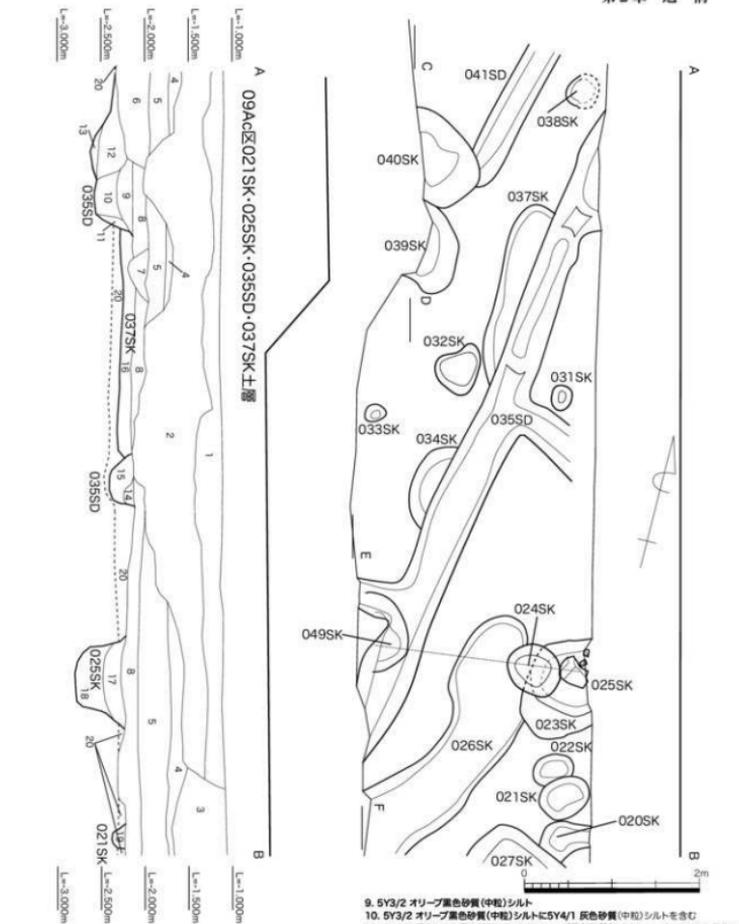


図 20 09Ac 区 041SD・043SK 遺構図 (1/50)



- 09Ac区021SK・025SK・035SD・037SK土層
1. 砕石コンクリートガラ(豊地土)
 2. 10VR3/3 黒褐色砂質(中粒)シルト
 3. 10VR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物、ゴミを含む
 4. 10VR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
 5. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト
 6. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
 7. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色シルト質中粒砂の混土
 8. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(底倉庫)

9. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
10. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルトを含む
11. 5Y4/1 灰色シルト質中粒砂に5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトブロックを少量含む
12. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 砂粒/1 灰色シルト質中粒砂を含む
13. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質中粒砂
14. 2.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
15. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
16. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
18. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
19. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基礎層)

図21 09Ac区021SK・025SK・035SD・037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図1 (1/50)

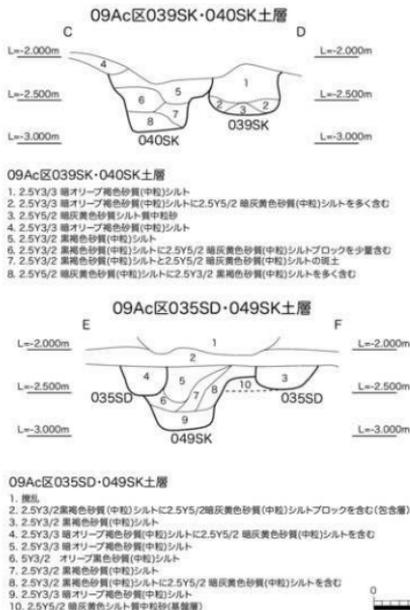


図 22 09Ac区 021SK・025SK・035SD・037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図2 (1/50)

落ち込み、南肩部はゆるやかな傾斜になっている。調査時には、上位層とは明瞭に区分された灰色砂質シルト層を包含層2とし、その上位の暗灰黄色シルト以上を包含層とし遺物を取り上げた。また096NRの南肩に接して、焼土ブロック・炭化物を多く含む暗オリーブ褐色砂質シルト層の広がり097SXを検出した。この097SXは、幅250cmにわたる不明瞭な落ち込みで、096NRの堆積の一部とも考えられる。この097SX部分については包含層3として遺物を取り上げている。さらに包含層2とした灰色砂質シルト層の下位で、097SX部分を除いた層を包含層4として掘り下げていたが、-300cm程のところまで湧水が激しくなり、調査区の幅も狭いことから、更な

る掘削は断念した。時期は包含層とした上位層が中世～近世、包含層2が中世後半、包含層3・4が古墳時代～古代になる。

2. 09B区

現道及び民家出入り口部分を控えて、北からBa・Bb・Bc区の3区に分けて調査を行った。

(1) 09Ba区 (図24・写真図版6)

最上位の整地層下の暗オリーブ褐色砂質シルト・暗灰黄色砂質シルトを除去した-180cm～-200cmのオリーブ褐色砂質シルト面で、黒褐色砂質シルトを埋土とする深さ約20cmの落ち込み003SKを確認した。出土遺物から003SKの

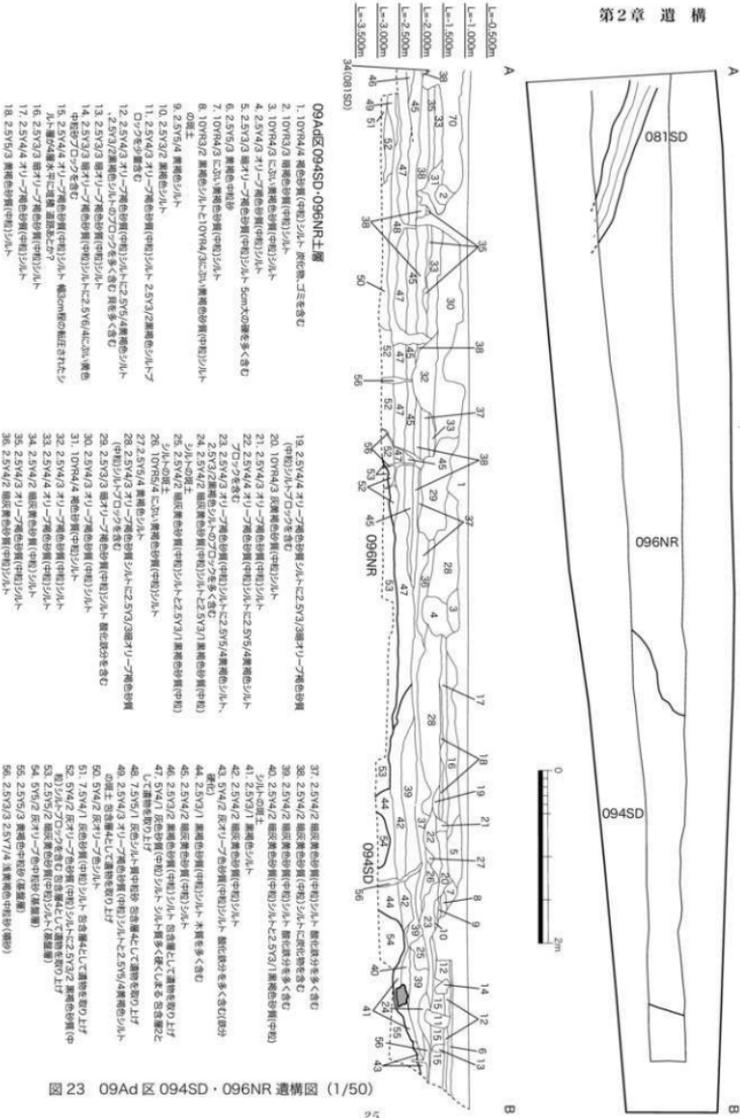


図 29 09Ad区 094SD・096NR 構図 (1/50)

- 094区 094SD・096NR 土層**
1. 10YR4/4 褐色黄包質(中粒)シルト・灰化層・下層を成す
 2. 10YR4/3 褐色黄包質(中粒)シルト
 3. 10YR4/2 褐色黄包質(中粒)シルト
 4. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 5. 2.5Y3/3 黄包質(中粒)シルト
 6. 2.5Y3/4 黄包質(中粒)シルト
 7. 10YR4/2 褐色黄包質(中粒)シルト
 8. 10YR4/3 褐色黄包質(中粒)シルト・黄包質包質(中粒)シルト
 9. 2.5Y5/4 黄包質シルト
 10. 2.5Y4/2 黄包質シルト
 11. 2.5Y4/3 オリーブ褐色包質(中粒)シルト・2.5Y3/2 黄包質シルト・フクロクマシ土層
 12. 2.5Y4/3 オリーブ褐色包質(中粒)シルト・2.5Y3/2 黄包質シルト
 13. 2.5Y3/3 黄包質(中粒)シルト
 14. 2.5Y3/2 黄包質(中粒)シルト
 15. 2.5Y3/2 黄包質(中粒)シルト
 16. 2.5Y3/2 黄包質(中粒)シルト
 17. 2.5Y4/4 オリーブ褐色包質(中粒)シルト
 18. 2.5Y3/3 黄包質(中粒)シルト
 19. 2.5Y4/4 オリーブ褐色包質シルト・2.5Y3/2 黄包質シルト
 20. 10YR4/3 褐色黄包質(中粒)シルト
 21. 2.5Y4/4 オリーブ褐色包質(中粒)シルト
 22. 2.5Y4/4 オリーブ褐色包質(中粒)シルト・2.5Y3/4 黄包質シルト
 23. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 24. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト・2.5Y3/1 黄包質(中粒)シルト
 25. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 26. 10YR4/2 褐色黄包質(中粒)シルト
 27. 2.5Y4/4 オリーブ褐色包質(中粒)シルト
 28. 2.5Y4/4 オリーブ褐色包質(中粒)シルト
 29. 2.5Y3/2 黄包質(中粒)シルト
 30. 2.5Y4/4 オリーブ褐色包質(中粒)シルト
 31. 10YR4/4 褐色黄包質(中粒)シルト
 32. 2.5Y4/4 オリーブ褐色包質(中粒)シルト
 33. 2.5Y4/4 オリーブ褐色包質(中粒)シルト
 34. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 35. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 36. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 37. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト・黄包質包質多量含む
 38. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 39. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 40. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 41. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 42. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 43. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 44. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 45. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 46. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 47. 2.5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 48. 7.5Y6/1 灰化層(中粒)シルト
 49. 5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 50. 5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 51. 7.5Y6/1 灰化層(中粒)シルト
 52. 5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 53. 2.5Y5/2 黄包質(中粒)シルト
 54. 5Y4/2 黄包質(中粒)シルト
 55. 2.5Y3/3 黄包質(中粒)シルト
 56. 2.5Y3/3 黄包質(中粒)シルト

日置本郷B遺跡

時期は中世前半期と考えられる。

(2) 09Bb区 (図24・写真図版6)

堅くしまった互層状堆積をなす黄褐色砂質シルトを除去した約-180cm面で、貝層の広がりを確認した。貝層はハマグリ・マガキ・アサリ・シジミで構成されており、上部を貝層3上位、下部を貝層3下位、さらにその下位を貝層3最下位としてサンプリングを行った。その後貝層を全て取り除いたところ、調査区ほぼ全てが溝及び土坑内の堆積と確認されたので、004SDと命名した。この004SDの下端については確認できるが、上端は擾乱部に切られたり、調査区外で不明である。004SDの埋土である貝層3上位では507・509の南部系陶器山茶碗、下位では508の南部系陶器山茶碗が出土しており、時期は中世と考えられる。

(3) Bc区 (図24・写真図版6)

やや互層状に堆積するオリブ褐色砂質シルト層を除去した約-180cm面で、貝層の広がりを確認した。貝層はハマグリ・マガキ・アサリ・シジミで構成されており、貝層1としてサンプリングした。貝層の下面は黄褐色砂の基盤面となっており、001SKと002SKの2つの土坑を検出した。上記の貝層1は、001SKの埋土である混貝土層の上に重なって堆積しており、連続する堆積の可能性もある。001SKの深さ30cmを測る。また南側の深さ30cmを測る002SKの埋土にもハマグリ・マガキ・アサリ・シジミが含まれており、貝層2としてサンプリングした。002SKの貝層2からは灰軸陶器(図40-510)が出土していることから、時期は平安時代前期と考えておきたい。

3. 09C区

現道及び民家出入り口部分を控えて、北からCa区～Cf区の6区に分けて調査を行った。

(1) Ca区 (図25・写真図版6)

標高約-230cmの暗灰黄色砂質シルト層とその下位の黒褐色砂質シルト層の境あたりで、厚さ8cmのハマグリ・アサリを含む混貝土層を検出

したが、明瞭な遺構は確認できなかった。また南東隅で、黒褐色砂質シルトと黄灰色砂質シルトの斑土を埋土とする土坑005SKを検出している。

(2) Cb区 (図25・写真図版6)

明瞭な遺構は確認されていないが、-210cm～-230cmの黄灰色砂質シルト層では近世陶磁器が、さらに下位の黒褐色砂質シルト層では古代～中世の陶器・土師器が出土している。さらに-280cm以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

(3) Cc区 (図26・写真図版7)

明瞭な遺構は確認されていないが、-240cmで検出した黒褐色砂質シルト層では古代～中世の陶器・土師器が出土している。黒褐色砂質シルト層上面には固い鉄分の沈着が見られる。さらに-270cm以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

(4) Cd区 (図26・写真図版7)

-240cmで検出された黒褐色砂質シルト層もCc区と同様に、上面には固い鉄分の沈着が見られ、古代～中世の陶器・土師器を含んでいる。この黒褐色砂質シルト層を切り込んで、鉄分を多く含む土坑が確認された。さらに-270cm以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

(5) Ce区 (図27・写真図版7)

明瞭な遺構は確認されていないが、-260cmで検出した黒褐色砂質シルト層では古代～中世の陶器・土師器、近世陶磁器が出土している。さらに-280cm以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

(6) Cf区 (図27・写真図版7)

-260cm付近まで溝または土坑と思われる近世の掘り込みがあり、それに切られるように-250cmから古代～中世の陶器・土師器の遺物を含む黒褐色砂質シルト層が検出された。さらに-270cm以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

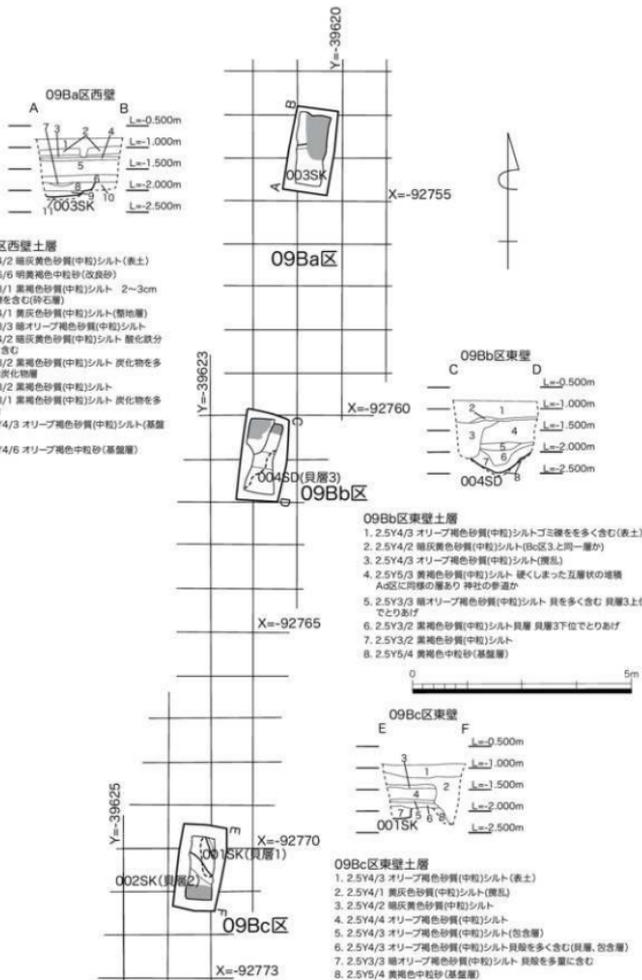


図24 09B区遺構図(1/100)

日置本郷B遺跡

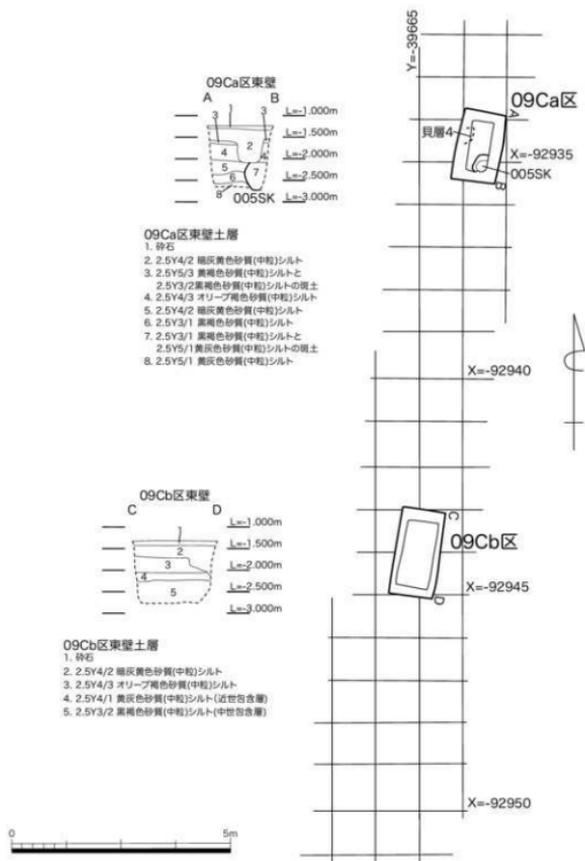


図 25 O9C 区遺構図 1 (1/100)

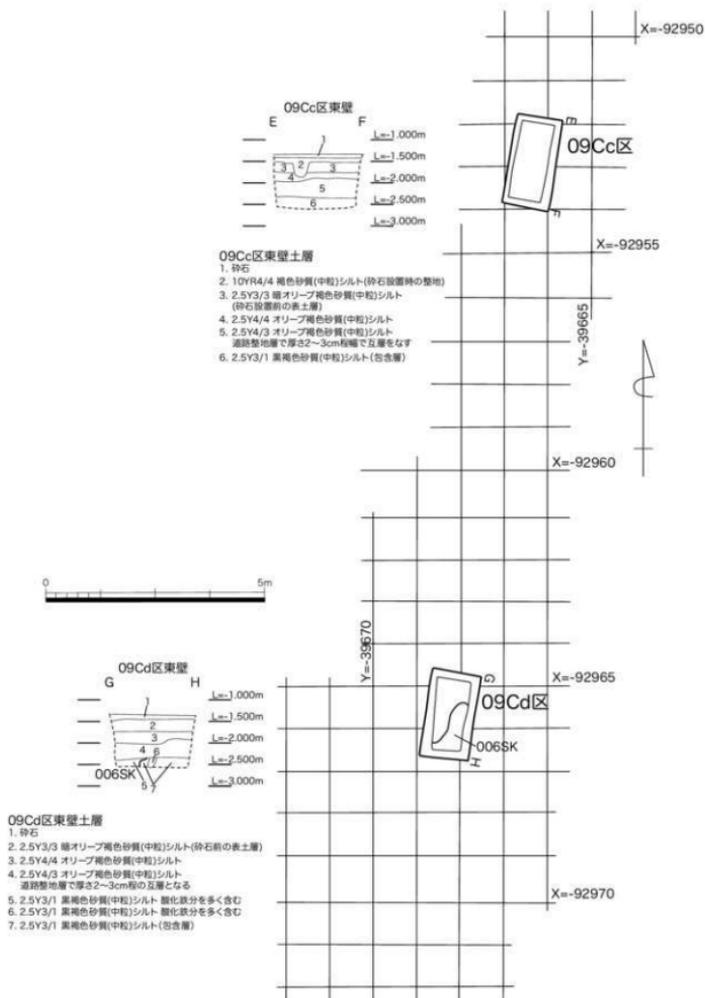


図26 09C区遺構図2 (1/100)

日置本郷B遺跡

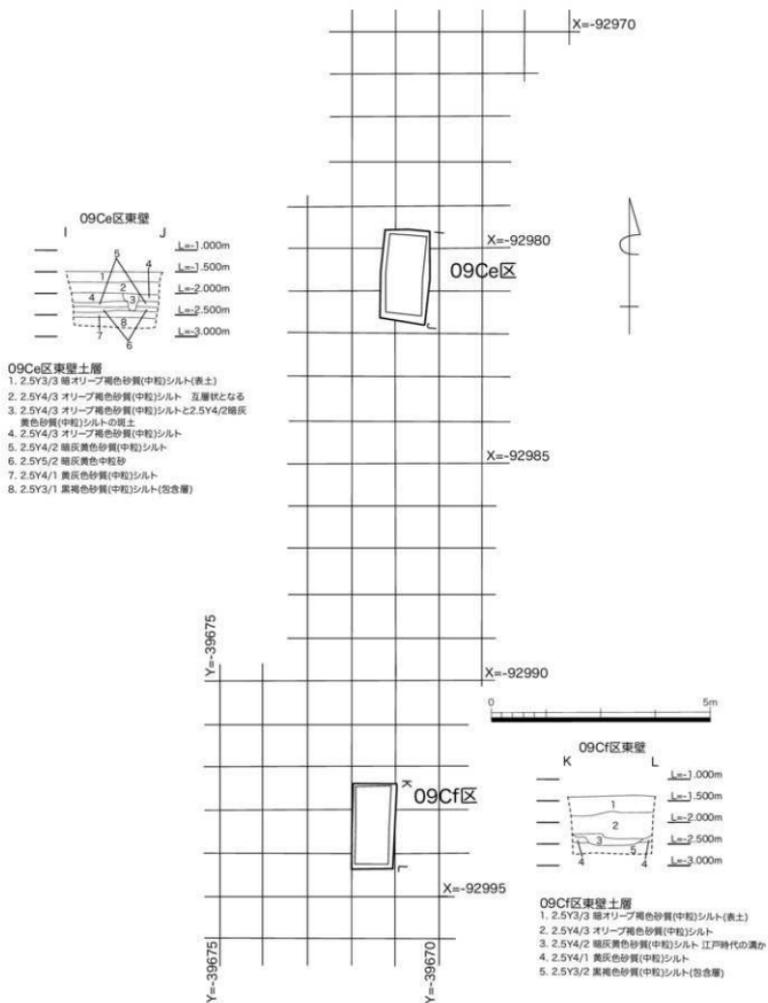


図 27 O9C 区遺構図 3 (1/100)

第3章 出土遺物

出土遺物は、09A区から出土したものがほとんどで、09B区・09C区のもの少量ある。主に遺構の時期を考える上で、重要と思われる資料を優先して抽出し、その後包含層出土のものについて、グリッドを目安に、09Aa区から09Ad区を分けて、出土遺物の状況を反映するように遺物を選び出した。また、製塩土器や緑釉陶器、青磁、白磁、古瀬戸陶器、瓦と、土鍾、陶丸、加工円盤などの土製品も優先的に図化を行った。

1. 土器・陶磁器

(1) 09A区遺構出土の土器・陶磁器 (図28-1～図31-165)

001NR (図28-1～4)：1は土師器の受口口縁甕で、口縁径14.0cm。2は青磁の四耳壺の肩部、3は古瀬戸陶器の灰軸直線大皿で、底部に三足が付く。4は常滑産の甕で外反する口縁部の端部が上下のびて帯状になるもの。

002NR (図28-5～32)：5～9は須恵器で、5は受け部のある杯身に伴う杯蓋、6・7は受け部のある丸底の杯身、8は丸底の杯身、9は口縁径12.0cmの杯身。10・11は灰軸陶器で、10は内湾する高台の付く碗、11は内・外面灰軸が残る皿。12～23は南部系陶器で、12～14・15は高台が付く山茶碗、15・16・18～21は高台がない山茶碗、20の外面底部に「○」に「大」を書いた墨書がある。14と17は内・外面に煤が付着し、18は内面に煤が付着する。22は小碗の底部、23は小皿。24～27は北部系陶器で、24～26が山茶碗、27が小皿、25の内面に煤が付着する。28は青磁の碗で外面に鍋蓋弁文がある。29は土師器の小皿、外面底部付近に斜め上りのナデ痕がみられる。30は常滑産の甕で、口縁部が前後に拡張されて外側に面を作る。31は古瀬戸陶器の緑釉皿で、口縁部に灰軸がつけられている。32は常滑産の甕の底部。

003SK (図28-33～38)：33～35は灰軸陶器の碗で35は外面に煤が付着する。36～38は南

部系陶器で36・37が山茶碗で、比較的丁寧な作りのもの、38が小碗である。

005SK (図28-039・040)：39が内・外面に灰軸が付く灰軸陶器の碗、40は外面に横ハケをする土師器の羽釜形鍋。

007SD (図28-041-042)：41は高台が付く杯身、42がナデ調整の甕。

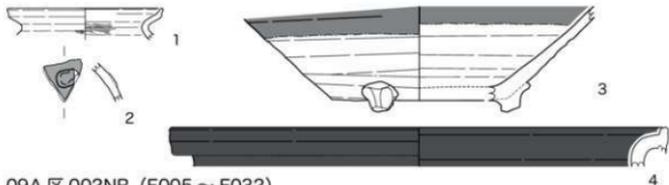
008SK (図28-043)：北部系陶器の小皿で、内面底部がやや盛り上がる形状である。口縁部径8.2cm。

017SD (図29-044～047)：江戸時代後期の遺物が主体で、44は灰軸方形箱型の水注、45が外面に須須輪の絵がある磁器碗、46が内外面に灰軸のかかる小碗で、外面に珠文を円形にめぐらせた文様を描いている。47は筒形の磁器碗で外面に水草の絵があり、内面の上下端に直線文が1条ずつひかれている。

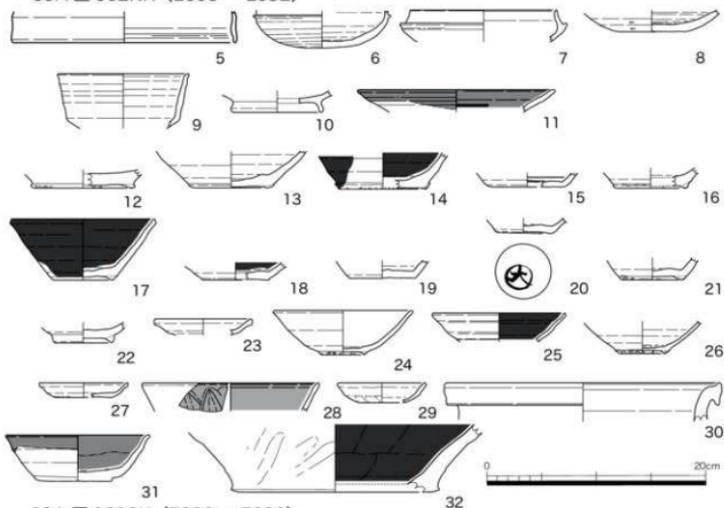
018SE (図29-048～101)：古代から室町時代の遺物が出土しており、48～54が須恵器で48～50が杯蓋、51が蓋受け部のある杯身、52が高台付きの杯身、53が体部が丸く立ち上がる鉢、54は高台のない杯身。55～58が灰軸陶器碗で、55・56・58の内面に灰軸が施されている。59～78が土師器で、59～61が古代のもの、62～78が中世のもの。59は高杯の脚部片、60が平底の甕の底部、61がハケ調整の甕。62～65が口縁部径10cm以下の小皿、64～74が径10cm以上の皿で、小皿は口縁部が丸く立ち上がるが、皿は全体的に口縁部が外反する形状で、69・72・74は口縁部の外反が強い。これらの皿は、内面と外面に斜め上がる捻れナデ調整がみられ、口縁部が強く横ナデされているもので、型作りの可能性がある。75・76は口縁部を内側に折り曲げる伊勢型鍋、77・78は羽釜形鍋。79は南部系陶器の山茶碗で、口縁部径14.0cm、80～97は北部系陶器で80～82・97は小皿で、83～96は山茶碗である。82は外面底部に「十」の墨書がある。83～85は口縁

日置本郷B遺跡

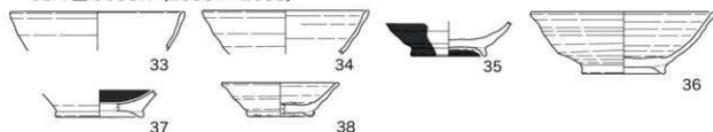
09A区 001NR (E001 ~ E004)



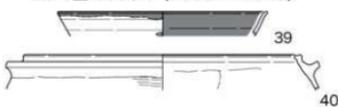
09A区 002NR (E005 ~ E032)



09A区 003SK (E033 ~ E038)



09A区 005SK (E039 ~ E040)



09A区 007SD (E041 ~ E042)



09A区 008SK (E043)



■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 灰化物・煤

図28 09A区遺構出土土器・陶磁器1 (1/4)

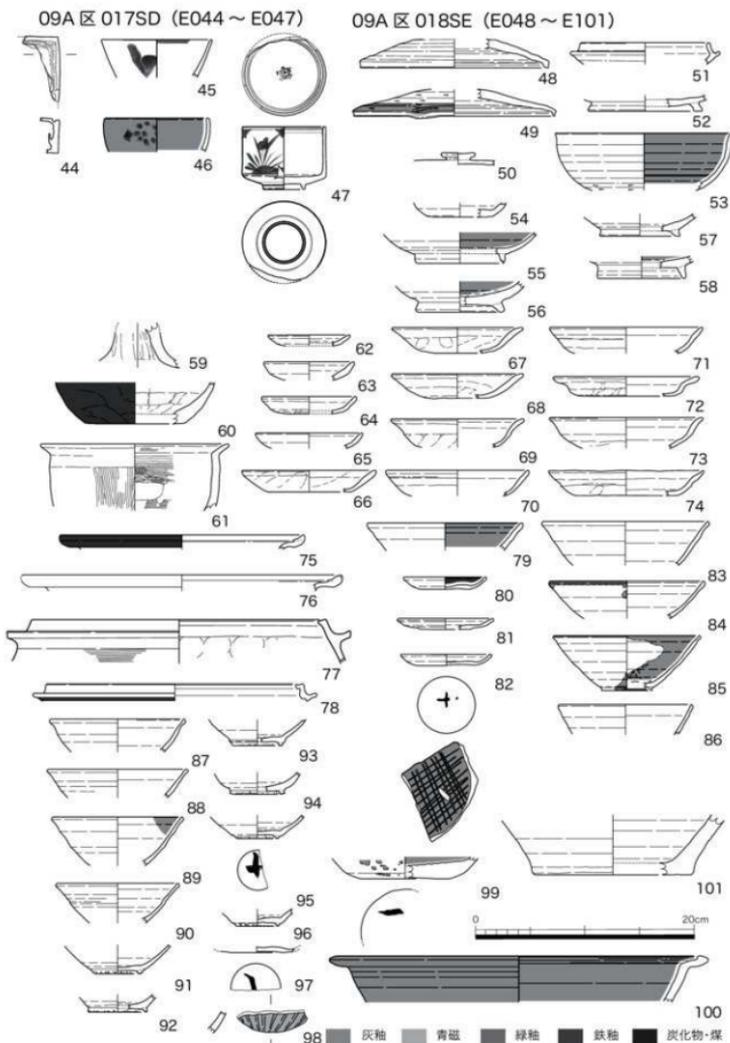
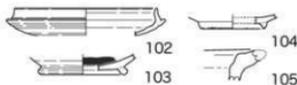


図29 O9A区遺構出土土器・陶磁器2 (1/4)

日置本郷B遺跡

09A区 020SK (E102 ~ E105)



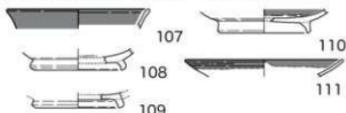
09A区 023SK (E106)



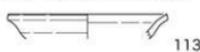
09A区 029SK (E0112)



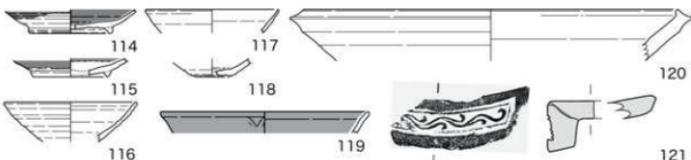
09A区 025SK (E107 ~ E111)



09A区 034SK (E0113)



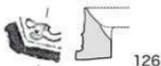
09A区 035SD (E114 ~ E121)



09A区 039SK (E122 · E123)



09A区 041SD (E0126)



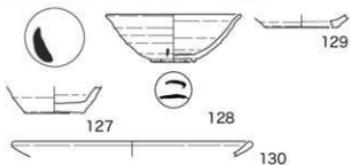
09A区 040SK (E124 · E125)



09A区 046SK (E0131)



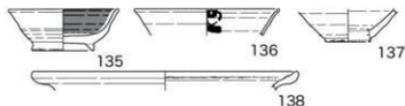
09A区 044SK (E127 ~ E130)



09A区 049SK (E132 ~ E134)



09A区 054SK (E135 ~ E138)



09A区 057SK (E142)



09A区 056SK (E139 ~ E141)



09A区 059SK (E143)



図30 09A区遺構出土土器・陶磁器3 (1/4)

口径が13cm～15cm程あり、86～90が口縁口径12cm程で83～85より薄手である。90～96は山茶碗の底部で、95と97の外底部に墨書が施されている。98は青磁の碗片、99は内面に卸目のある古瀬戸陶器の灰軸卸皿で、100は古瀬戸陶器の灰軸折縁鉢で内・外面に灰軸がかけられている。101は常滑産の裏の底部である。

020SK (図30-102～105) : 102は蓋受け部のある須恵器の杯身、104・105は灰軸陶器の碗で、断面内湾する高台である。105は清郷型鍋の口縁部で、灰軸陶器に伴う時期のものである。

023SK (図30-106) : 106は南部系陶器の山茶碗で、口縁口径13.0cmである。

025SK (図30-107～111) : 107～111は灰軸陶器で、107～110が碗、111が皿で、107と111は、内・外面に灰軸が施されている。

029SK (図30-112) : 112は古瀬戸陶器の灰軸小壺で、口縁部がすばまる形である。

034SK (図30-113) : 南部系陶器の山茶碗で、口縁口径14.4cm。

035SD (図30-114～121) : 114・115は灰軸陶器で、114が碗、115が皿で、ともに断面やや内湾する高台が付く。116～118は北部系陶器の山茶碗で、薄手のものである。119は青磁の碗で、外面に鍋道弁文がみられる。120は常滑産の片口鉢で、口縁口径34.0cm程である。121は中世の軒平瓦で、瓦当の半分が残存している。均整唐草文様で、全体に緩やかな太い線で表出され先端に若干の巻きがある。中心飾りは不明。外縁の幅は約1.0cmで上端は幅数mmの斜め削りが施される。瓦当頸幅は2.5cmで全体にナデ。頸面に離れ砂が付着する。平瓦部は厚さ1.7cm。一枚作りで側縁は斜めに削られている。接合方法は端面を斜めに削った平瓦に瓦当部を接合する。色調は黒色系で、焼成は硬質で全体に軽く焼しがかかっている。瓦は北部系陶器の時期に対応するものか。

039SK (図30-122-123) : 122は灰軸陶器の皿で、内・外面に灰軸が施されている。123は北部系陶器の山茶碗で、口縁口径13.0cmである。

040SK (図30-124・125) : 124・125は北部系

陶器の山茶碗で、124は内面に煤が付着している。

041SD (図30-126) : 126は中世の軒平瓦で、瓦当のごく一部が残る。瓦当文様は線の細い均整唐草文様と考えられるが全形は不明。121とは線の太さや巻きの形状が異なることから別范(文様)と判断される。外縁幅は0.8～1.0cm。瓦当頸幅は3.3cm。離れ砂の付着は認められない。平瓦部は不明であるが、接合方法は121と同じである。その接合面から平瓦の厚さは1.8cm前後と推測される。色調は黒～灰色系。焼成は硬質でムラのある焼しがかかっている。

044SK (図30-127～130) : 127は南部系陶器の高台のない山茶碗で、内底部に墨書がみられる。128と129は北部系陶器の山茶碗で、128は口縁口径12.0cmで外底部に「二」の墨書がみられる。130は土師器の皿と思われるもので、口縁口径21.4cm。

046SK (図30-131) : 131は近世後期の灰軸仏燭台である。

049SK (図30-132～134) : 132は製塩土器の脚部、133・134は灰軸陶器の皿と碗で、134の内・外面には、灰軸がかかっている。

054SK (図30-135～138) : 135は南部系陶器の小碗で、内面に灰軸が認められる。136・137は北部系陶器の碗で、136の内面に墨書がみられる。138は口縁端部を内側に折り曲げる伊勢型鍋である。

056SK (図30-139～141) : 139は南部系陶器の山茶碗の底部で、断面三角形の高台が付く。140は北部系陶器の小皿、141は土師器の小皿である。

057SK (図30-142) : 142は製塩土器で、内・外面ナデ調整で、口縁口径6.5cm。

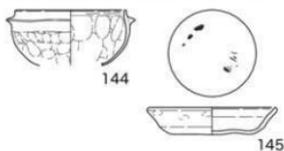
059SK (図30-143) : 143は緑軸陶器の高台付き杯身で、内・外面に緑軸が施されている。

060SK (図31-144・145) : 144は小型の羽釜形鍋で、口縁口径が10.0cm、体部はナデ調整される。145は土師器の皿で、口縁口径11.5cm、内面に墨痕がみられる。

063SK (図31-146) : 146は北部系陶器の山茶碗で、高台口径5.0cm。

日置本郷B遺跡

09A区 060SK (E144・E145)



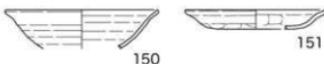
09A区 063SK (E146)



09A区 067SK (E147)



09A区 070SK (E150・E151)



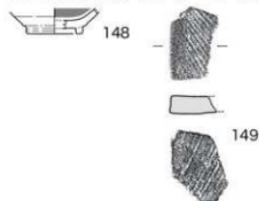
09A区 074SK (E152・E153)



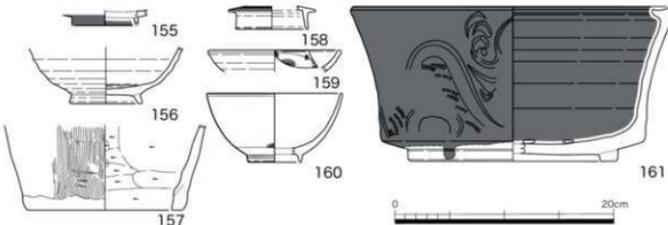
09A区 079SK (E154)



09A区 068SK (E148・E149)



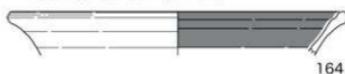
09A区 081SD (E155～E161)



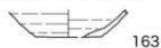
09A区 083SK (E162)



09A区 087SK (E164)



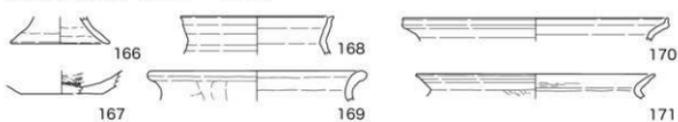
09A区 086SK (E163)



09A区 092SK (E165)



09Aa区包含層 (E166～E206)



■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤

図31 09A区遺構出土土器・陶磁器4、09Aa区包含層出土土器・陶磁器1 (1/4)

067SK (図31-147): 147は北部系陶器の山茶碗で、口縁径13.0cm。

068SK (図31-148・149): 148は近世後期の灰軸碗、149は中世の平瓦で成形台一枚作りによる。厚さは1.7cm。凹面は糸切痕、凸面はそれに加えて離れ砂の付着。色調は黄褐色系。焼成はやや軟質で腫しはかかっていない。

070SK (図31-150・151): 150は北部系陶器の山茶碗、151はナデ調整の土師器の皿で、口縁部が強く外反している。

074SK (図31-152・153): 152は南部系陶器の山茶碗で、高台が欠損している。153は大空期の重圓皿である。

079SK (図31-154): 154は須恵器の杯身の底部、底部径7.6cm。

081SD (図31-155～161): 155は緑軸陶器の碗と思われるもの、156は灰軸陶器の深碗で、高台が比較的高いもの。157は土師器の甗の下半部で、外面縦ハケ調整、内面横方向のケズリ調整。158は古瀬戸陶器の灰軸蓋で、身受け部がある。159・160は近世後期の外面に染付けの文様がある磁器で、159が皿、160が碗である。161も近世後期の灰軸鉢で、外面に大柄の波状文とその間を埋める刺突文で文様が刻まれている。

083SK (図31-162): 南部系陶器の山茶碗で、口縁径13.4cmをはかる。底部に不整形な高台が付く。

086SK (図31-163): 須恵器の杯身で、高台の付かないもの。

087SK (図31-164): 南部系陶器の片口鉢で、口縁部径30.0cm程のものである。

092SK (図31-165): 165は北部系陶器の山茶碗で、口縁部径13.5cm。

(2) 09Aa区包含層出土の土器・陶磁器 (図31・図32-166～206)

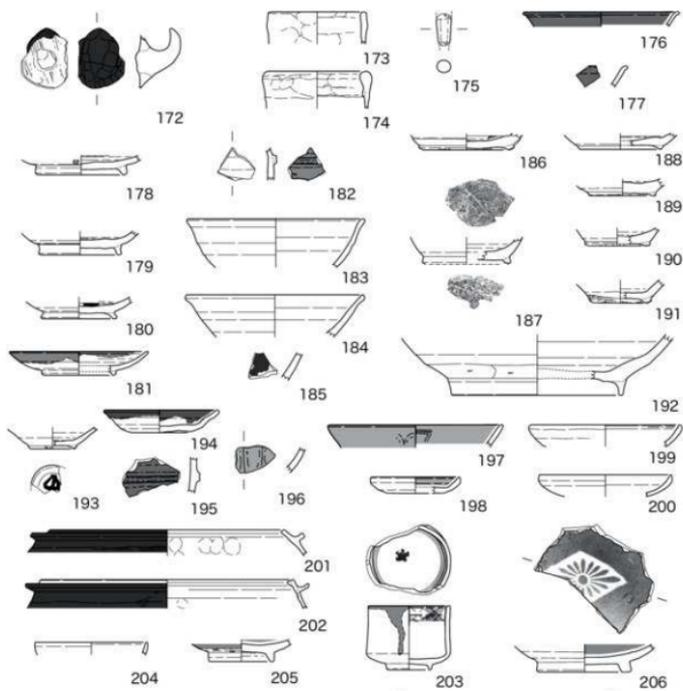
古代から近世後期のものまであり、古代から中世のものが多い。166～175は土師器で、166が高杯の脚部、167が杯身か皿、168は短頸壺で口縁部径13.8cm、頸部径12.7cm。169は口縁部が外反して丸くおわる端部の甕、170が口縁部を上方につまみ上げる形態の甕、171は口

縁部が断面「く」の字状に外反しておわる甕である。172は瓶の把手部、173～175は製塩土器で、ナデ調整されており、174の口縁部はやや肥厚している、175は脚部である。176・177は緑軸陶器の碗で、内・外面に緑軸が施されている。178～182は灰軸陶器で、178～180が碗、181が皿、182が壺の体部片か。181の口縁部付近の内・外面に灰軸がみられる。183～192は南部系陶器で、183～191は山茶碗、185の内面に有機物が付着し、187の内面に葉脈の圧痕がみられる。192は片口鉢で、高台径は15.4cmである。193は北部系陶器の山茶碗の底部で、外面底部に墨書がみられる。194・195は古瀬戸陶器で、194は口縁部の内・外面に鉄軸が妨がる鉄軸小皿、195が灰軸壺か。196・197は外面に鋪道弁文のある青磁碗、198は土師器の小皿で、内面と破面に朱らしきものが付着している。199・200が丸みのある土師器の皿でナデ調整のもの、201・202が羽釜形鍋で外面が保っている。203～206は近世後期のもので、203・204が磁器で、203は内・外面に染付けのある筒形碗、204は白磁碗、205は内・外面に灰軸がかかる碗で、削り出し高台。206は灰軸により内面に菊花文を摺り付けた皿で、断面形状の高台を削り出す。

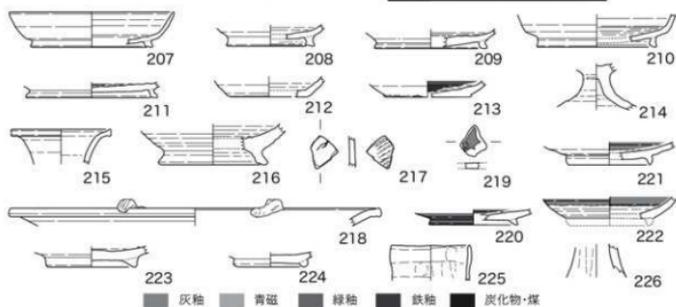
(3) 09Ab区包含層出土の土器・陶磁器 (図32～図34-207～283)

古代から近世のものまであり、古代のものも一定量あるが、中世のものが主体を占める。207～218が須恵器で、207～211が高台付きの杯身である。212・213は高台のない杯身、214は高杯の脚部、215・216は瓶(壺)の口縁部と底部、217はタタキ調整のある甕の体部片で、内面に墨痕がみられる。218は口縁部径33.6cmをはかる甕。219・220は緑軸陶器で220は外にややひらく高台が付く杯身。221～224は灰軸陶器の碗で、221は断面内湾状の高台、222は断面三角形の高台、224は断面丸く低い内湾状高台が付く、222は内・外面に灰軸が施されている。225～227は古代の土師器で、225が製塩土器の口縁部、226が高杯の脚部、227が甗の口縁部と思われる。228～233は中世の土師器で、228～231がナ

日置本郷B遺跡



09Ab区包含層 (E207 ~ E283)



■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤

図 32 09Aa区包含層出土土器・陶磁器2、09Ab区包含層出土土器・陶磁器1 (1/4)

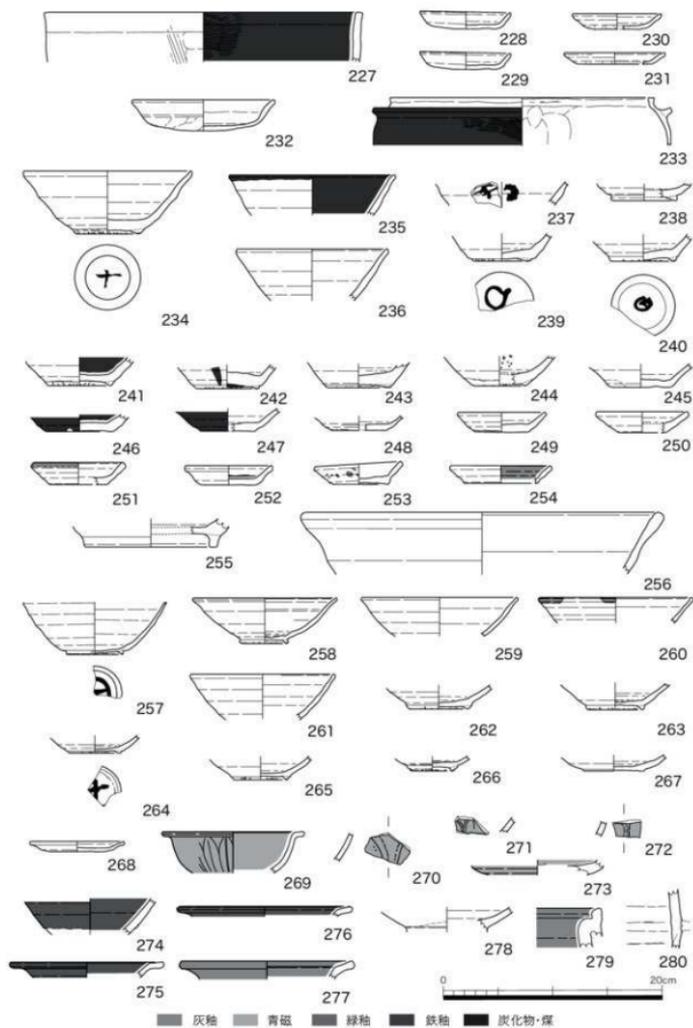
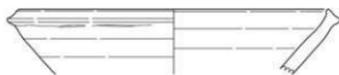


図33 09Ab区包含層出土土器・陶磁器2 (1/4)

日置本郷B遺跡



281



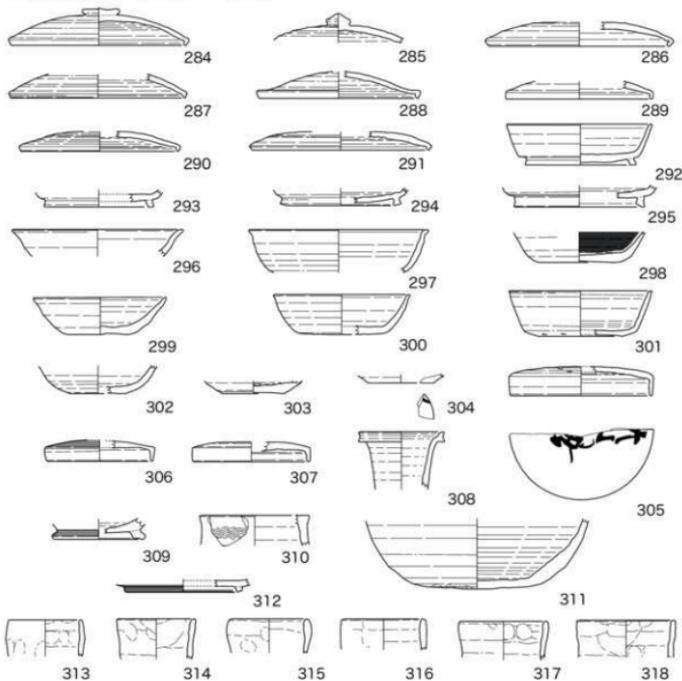
282



283



09Ac 区包含層 (E284 ~ E399)



■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤

図 34 09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 3、09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 1 (1/4)

デ調整で、口縁部がやや外反する小皿、232は口縁部径13.4cmをはかる口縁部がやや外反する皿で、底部付近に斜め上かりの捻り状のナデ痕がみられ、口縁部をヨコナデする。233は羽釜形鍋で、丸みをもつ体部の外面に煤が付着している。234～256は南部系陶器で、234～247は山茶碗で、234・238～244は高台が付くもの、244～247は高台が付かないものである。234には外面底部に「十」の墨書がみられ、237の体部の内・外面、239・240の外面底部に「○」状の墨書がみられる。また235の内面と外面口縁部、241の内面、242の外面の一部、246の内・外面、247の外面に煤が付着している。248～254は小皿で251・254に自然釉の付着がみられる。255が片口鉢の底部、256が片口鉢の口縁部である。257～268は北部系陶器で、257～267は山茶碗で、257・258・262～266は高台があるもの、267は高台がないものである。257・264の外面底部には墨書があり、264の墨書は「十」か。268は器高が低い扁平な小皿である。269～273は青磁の碗で、269は口縁部がほぼ水平に外反して折れるもので、269～272は外面に鎗蓮弁文をもつ。274～277は古瀬戸陶器で、274は天目茶碗の体部片、275・276は口縁部が折れて水平に外反する鉄軸折縁皿、277は口縁部が外反して折れる灰軸折縁深皿となる。278は白磁の碗、279は常滑産の甕の口縁部で、口縁端部を上下に拡張するもの、280は土師器の羽釜形鍋か。281は常滑産の鉢、282・283は中世の瓦。282は軒丸瓦で外縁周の約4分の1が残存する。瓦当文様は、巴文の周囲に連珠文が廻る。連珠は6個分を認め、珠文どうしは范傷が発生しており繋がったようになっている。巴文の形状はよくわからない。外縁幅は1.6cmあってやや重厚な印象がある。側縁や裏面はナデ。なお瓦当面全面に離れ砂が付着しており、范詰め時に用いたと考えられる。范詰め方法は、外縁を先行し、その後2回に分けて全体を詰める。丸瓦部は不明でありそれとの接合方法も不明である。色調は黒褐色系。焼成は硬質で軽く焼しがかかっている。283は平瓦で成形台一枚作りによる。厚さは1.7cmで凹面は全体にナ

デ消しであるが、粘土板切り出し時の糸切痕と細かい布目痕が若干みえる。凸面は側縁付近が縦方向ナデ、全体に離れ砂が付着する。平行タキキのような痕もあるが糸切痕の可能性もある。側縁はへう切り後ナデ。色調は黄褐色系。焼成は硬質で、焼しがかかっている。

(4) 09Ac区包含層出土の土器・陶磁器(図34～図36・284～399)

古代から近世までのものがあり、古代のものが主体を占める。284～311は須恵器で、284～291は杯蓋で、284には扁平なつまみ、285には径の比較的小さい厚みのあるつまみが付く。292～295は高台付杯身で、296は碗の口縁部に類似するが、高杯の可能性もあるもの、298～304は高台のない杯身で、297のように椀に近いものもある。305～307は壺蓋で、305の外面天井部に墨書がみられる。308・309は瓶で、308は頸が長い形態のものである。310は円形の甕の可能性のあるもので、側面と思われる面に波状文があり、天井部は平滑である。311は体部が丸みを帯びる鉢。312は緑釉陶器の高台付杯身。313～343は古代の土師器である。313～327は製塩土器で、口縁部径が6.5cm～9.6cmをはかるものがある、調整はナデ調整や指押しなどである。328は土師器の杯身で、当遺跡では出土数が少ない。329～337・341は口縁部が外反しておわる甕で、329が口縁端部をややつまみ上げるもので、330～334は端部を丸くするものである。335～337は甕の体部から底部のもので、外面の調整は、ハケ調整を主体とする。338は体部から口縁部が大きく広がっておわるもので、甕か瓶の可能性のあるもの、339は瓶の把手部分、340は口縁部から体部にあまりすばまらずにうつる形態で、瓶の可能性があり、口縁端部をややつまみ上げる特徴がある。342・343は清原型鍋で、口縁部が水平に外反して肥厚する。344～363は灰軸陶器で、344が瓶、345～360が碗、361～363が皿である。344は瓶の口縁部で、口縁端部を上下にひろげており、内・外面に灰軸がみられる。345～346は碗で、345・346・360は灰軸が内面と外面口縁部付近にみられる。360は

日置本郷B遺跡

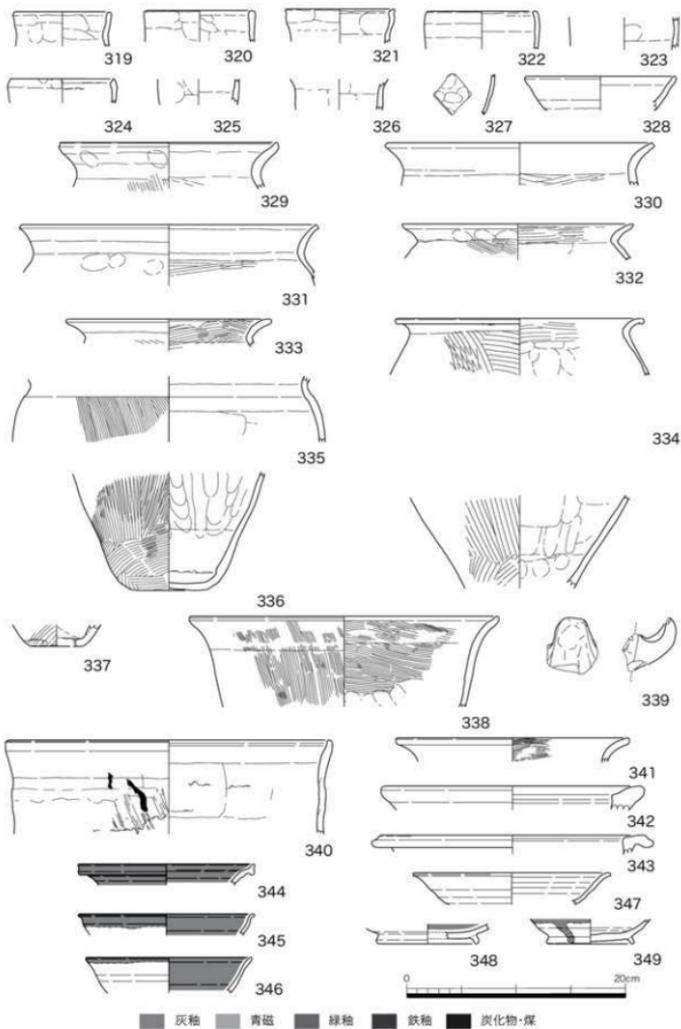


图 35 O9Ac 区包含層出土土器・陶磁器 2 (1/4)

小碗に近いもので、断面内湾状高台が付く。碗に付く高台では、355・356に断面方形高台が付く、352は外側にひらく高台が付く、その他は断面内湾状の高台である。353の内面底部に墨書がみられる。361・362は内・外面に灰軸が施される皿で、362は断面内湾状の低い高台が付く。364～376は南部系陶器で、364～373が山茶碗、374～376が小皿である。364と375には内・外面に灰軸がみられ、364は大振りな碗の形態で、高さ1.0cmの高い高台が付くことから、古い形態の山茶碗と思われる。364～372は高台が付くが、373は高台がないものである。377～381は北部系陶器の山茶碗で、377～380には高台が付くが、381は高台のないもの。378の外表面底部に「十」の墨書がみられ、380の外表面底部にも墨書がみられる。382～386は中世の土師器で、382～384が小皿、385・386が伊勢型鍋である。小皿では382は比較的丸い立ち上がりをもつ形態で、383の底部は3.0cmと小さく、底部から大きく外反して口縁部にいたるもの、384は器高が1.1cmと扁平な形態のものである。387～389は青磁の碗で、388の底部は比較的厚みがある。390は口縁端部が肥厚する玉縁口縁の白磁の碗で、口縁径16.6cmである。391は古瀬戸陶器の灰軸碗で、内・外面に灰軸がみられる。392～399は近世後期以後のものである。392は近世～近代の軒杖瓦で、瓦当のみの破片である。文様は左巴文で連珠が推定で12個廻り、全体に明瞭かつ繊細な文様出でである。焼成は硬質で全体に焼しが効かっている。393・394は近世後期にかかる天目茶碗、395は白色釉の磁器碗、396・397は白色釉の磁器の皿か碗、398・399は内・外面に染付けがある磁器の碗で、内面底部の印は同図のものである。

(5) 09Ad区包含層出土の土器・陶磁器(図37・図38-400～454)

古代から近世後期以後のものまでであるが、古代のものが多い。400～414は須恵器で、400が杯蓋、401～404が高台付杯身、405～411が高台のない杯身である。409の杯身の外面に光沢がみられ、411の杯身外面底部に線刻がみられ

る。412・413は壺で、412は口縁部が斜めにやや外反してのびる形である。414は壺の底部で、底部径20.0cmである。415～434は土師器で、415は内・外面に放射状の暗文のみられる杯蓋、416は内面に放射状暗文、外面にヨコミガキ調整がみられる皿である。417～427は製塩土器で、口縁部径6.0cm～9.0cmをはかるもので、420の外面に墨痕がみられる。428～431は外面にハケ調整を伴う壺で、口縁部が「く」の字状に外反するものである。432・433は清郷型鍋で、433は口縁部の肥厚が大きい。434は体部から内傾する口縁部をもつもので、外面に煤が付着する、中世の風炉の可能性もある。435～439は灰軸陶器で、435～438は碗で、439が皿である。435・436・438は断面が三角形高台や外側にひらく高台が付く碗で、437・439は内湾する低い三角形高台が付く。440～450は南部系陶器で、440～446が高台の付く碗、447・449が高台のない碗、450は底部がやや突出する小皿である。444・447は口縁部径がともに13.4cmで、高台の有無を除けば、同形同大である。452は中世の丸瓦で、厚さは1.6cm。凸面はナデ消しを行い、凹面は布目痕を残す。色調は黒褐色系で、焼成はやや軟質で凹面のみ焼しが効かかったのかやや黒っぽい。451・453・454は近世後期のものと思われるもので、451は外面に灰軸が施される磁器の壺、453は産地不明の壺、454は焙烙鍋と思われるものである。

(6) 09A区その他包含層出土の土器・陶磁器(図38-455～465)

09A区の調査中で、グリッドが判明しない資料から図化したものである。455は須恵器の壺の底部で、底部径10.8cm。456は灰軸陶器の碗で、内・外面に灰軸を施すもので、高台は断面内湾状のものが付く。457・458は土師器の製塩土器で、457は外面の一部にハケ調整らしき痕跡がみられる。459は土師器の清郷型鍋で、口縁部が外側に折れ、肥厚するもの。460は南部系陶器の高台のない碗で、外面底部に墨書がみられる。461は南部系陶器の小皿で、口縁部径7.8cmである。462～465は北部系陶器の碗で、462・463が

日置本郷B遺跡

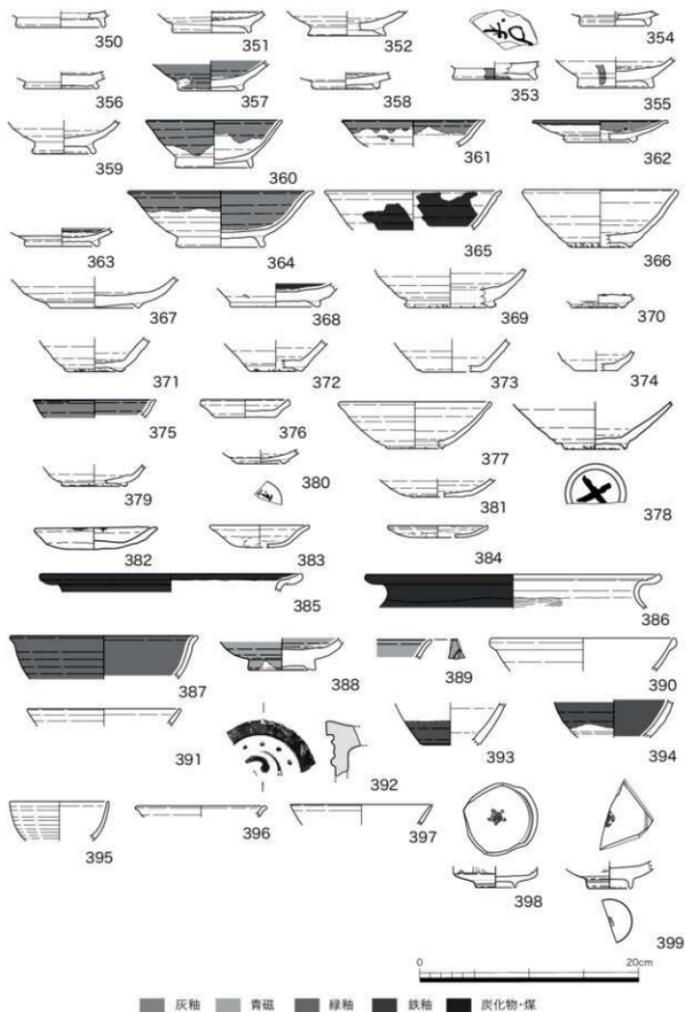


图 36 09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 3 (1/4)

09Ad区包含層 (E400 ~ E454)

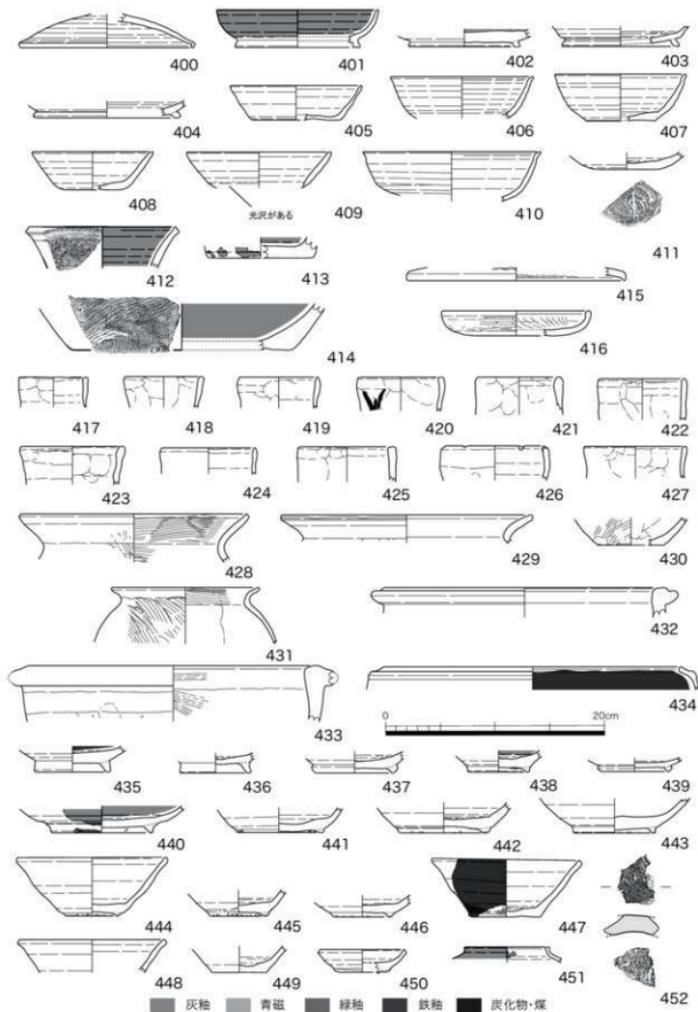


図37 09Ad区包含層出土土器・陶磁器1 (1/4)

日置本郷B遺跡

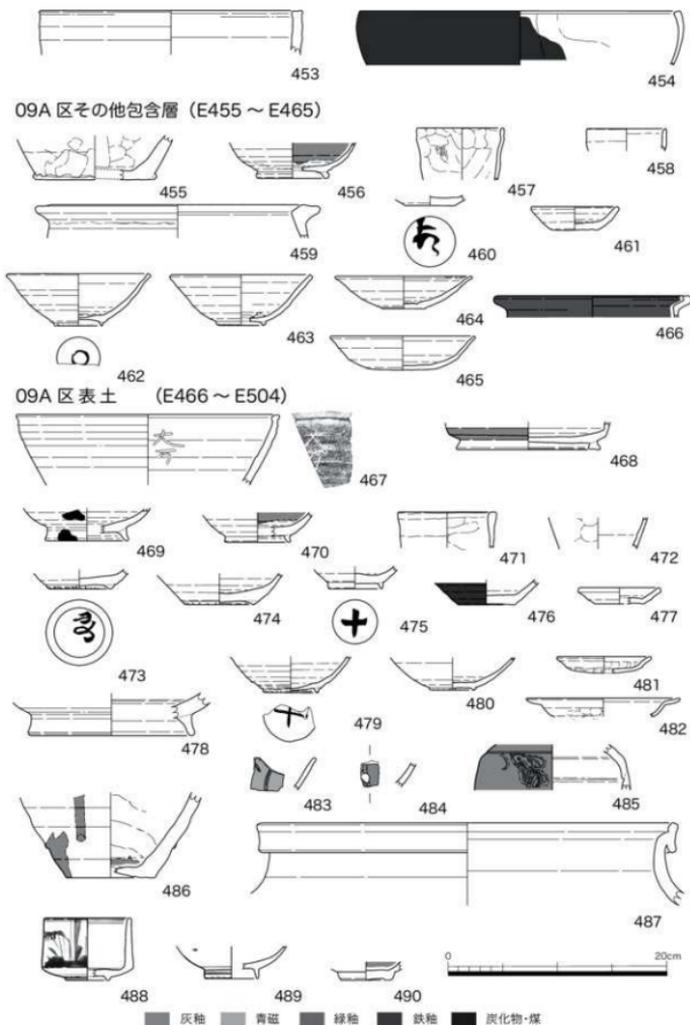


図 38 09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 2、09A 区その他包含層・表土出土土器・陶磁器 1 (1/4)

高台の付くもの、464・465が「高台の付かない器」の低いものである。462は外面底部に墨書「〇」がある。466は近世後期の受口口縁をもつ甕で、内・外面に鉄軸を施す。

(7) 09A区表土出土の土器・陶磁器(図38-466～490・図39-491～504)

09A区の表土はぎの段階でみつかったものから図化したものである。467・468は須恵器で、467は鉢で、内面に「大万」の刻書がみられ、468は高台付杯身である。469・470は灰軸陶器の碗で、断面外側にひらく高台が付く、469の外面に墨痕がみられる。471・472は土師器の製塩土器で、471は口縁部径が8.8cmである。473～478は南部系陶器で、473～475が高台のある碗、476が高台のない碗、477が小皿、478が片口鉢である。墨書が473の外面底部と475の外面底部に「十」の墨書がある。479・480は北部系陶器の高台の付く碗で、479の外面底部に「十」の墨書がある。481・482は中世の土師器で、481は口縁部が比較的強く外反する小皿で、482が丸みのある体部から口縁部が外側に屈曲してのびる皿で、2点ともナデ調整のものである。484・484は青磁の碗で、外面に鎬蓮弁文がある。485・486は古瀬戸陶器の灰軸が施される瓶子で、485には外面肩部に貼付けの文様がみられる。487は常滑産の甕で、口縁部径37.4cmをはかる大型のものである。488～504は近世後期以後のもので、488～494が磁器、495～499が施軸陶器、500が土師器、501～504が瓦である。磁器は内・外面に染付けの絵が描かれているもので、488が筒型に口縁部が立ち上がる碗、489・490が丸みを帯びた体部をもつ碗、491が小さい断面三角形の高台を削り出す皿、492～494が幅広いの高台を削り出すもので、492・494が皿、493は口縁部が屈曲して外側にひらく鉢である。施軸陶器では495が内・外面に鉄軸を施し、外面に白色軸の文様を描く、灰落としに転用したと思われる口縁端部の欠損がみられる。496は灰軸を内・外面に施す鉢で、497・498が鉄軸を施す搦鉢、499が色調がうぐいす色の施軸を施した筒型の火入れである。497は口縁部径30.7cm、

498の体部には掃り目が放射状に施されている。500は土師器の焙烙鍋で、口縁部径24.4cmである。501～504は軒棧瓦の瓦当部分で、焼成は硬質で全体に煙しかかっている。501が巴文、502～504が菊花文のものである。

(8) 09Ba区出土の陶器(図39-505・506)

505・506は近世後期以後の陶器で、505は内・外面に鉄軸を施し、口縁部付近を灰軸の重ね掛けがされている筒型の碗、506は天目茶碗の形態のもので、内・外面に鉄軸を施し、口縁部付近に灰軸を重ね掛けするものである。

(9) 09Bb区004SD貝層3出土の陶器(図40-507～509)

507～509は南部系陶器の山茶碗で、507が口縁部径14.0cm、508の高台部径が6.8cm、509の高台部径が8.4cmである。12世紀後半頃のものと思われる。

(10) 09Bc区002SK貝層2出土の陶器(図40-510)

510は内・外面に灰軸が施された灰軸陶器の段皿で、断面比較的高い内湾状高台が付くものである。

(11) 09Ca区出土の陶器(図40-511・512)

511は灰軸陶器の瓶(壺)で、外面に灰軸が垂れてみられる。512は常滑産甕で、底部径19.0cmをはかる。

(12) 09Cb区包含層出土の陶器(図40-513～515)

513は須恵器の高台付杯身、514は緑軸陶器の碗、515は近世後期の下半部の丸い陶器碗で、内・外面に鉄軸と灰軸の重ね掛けがみられる。

(13) 09Cc区包含層など出土の陶器(図40-516・517)

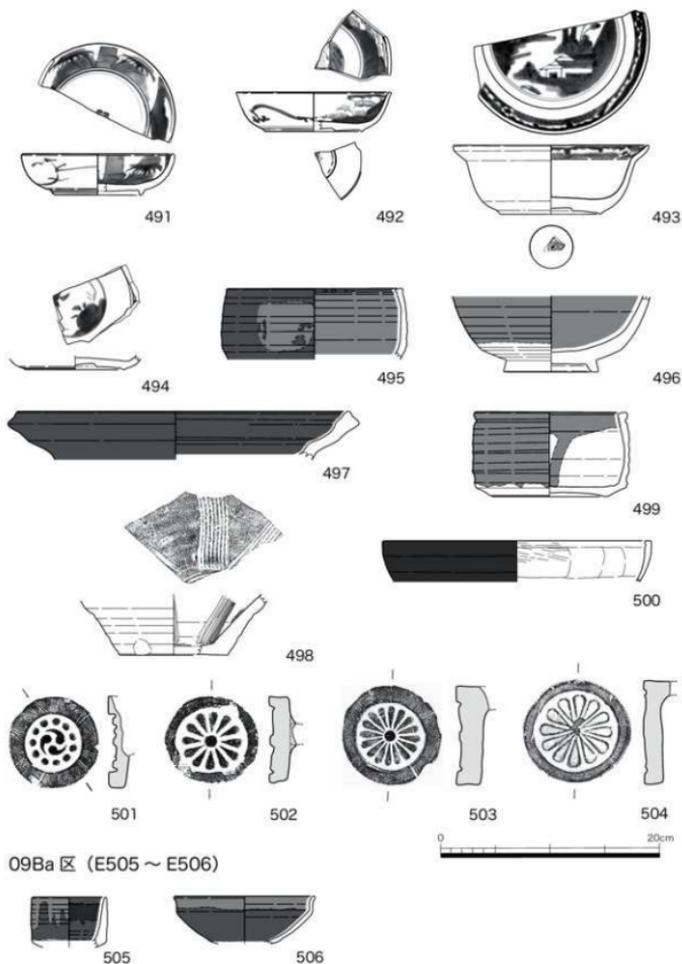
516は南部系陶器の小碗で、断面三角形の高台が付く、517は南部系陶器の山茶碗で口縁部径12.4cmである。

(14) 09Cd区出土の陶器(図40-518・519)

518は須恵器の高台のない杯身で、519は南部系陶器の山茶碗で、内面に煤の付着がみられる。

(15) 09Ce区包含層など出土の陶磁器(図40-520～528・図41-531～533)

日置本郷B遺跡



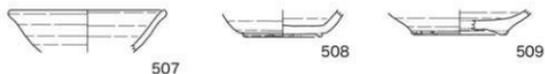
09Ba区 (E505 ~ E506)



■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤

图 39 09A区表土出土土器・陶磁器2、09Ba区出土土器・陶磁器(1/4)

09Bb区 004SD 貝層3 (E507 ~ E509)



09Bc区 002SK 貝層2 (E510)



09Ca区 (E511・E512)



09Cb区 包含層 (E513 ~ E515)



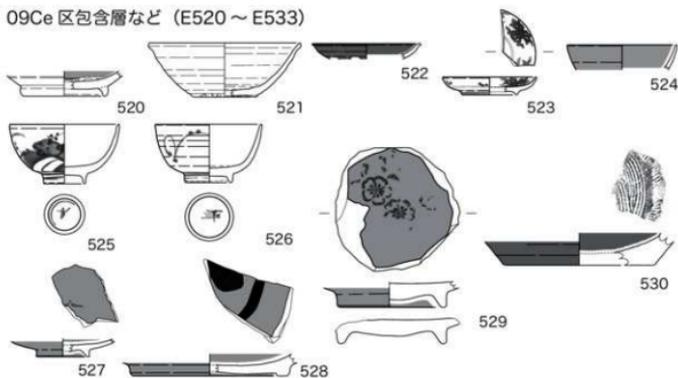
09Cc区 包含層など (E516・E517)



09Cd区 (E518・E519)



09Ce区 包含層など (E520 ~ E533)



■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤

図40 09Bb区・09Bc区・09Ca区～09Ce区出土土器・陶磁器 (1/4)

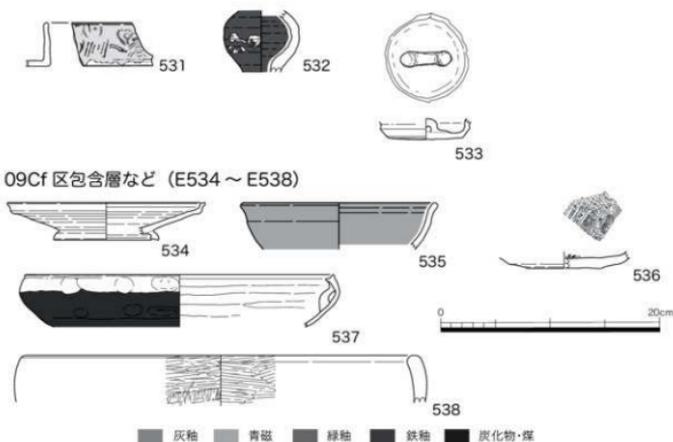


図41 09Ce区・09Cf区出土土器・陶磁器(1/4)

平安時代から近世までのものがある。520は灰釉陶器の碗で、断面比較的高い内湾状高台が付く。521は南部系陶器の山茶碗で口縁部径14.0cmのもの。522～533は近世後期のもので、522は内・外面に鉄釉を施す小皿、523は内・外面に染付けのある磁器の小皿、524は内・外面に灰釉に近い施釉がみられる陶器の碗、525・526は外面に染付けの樹木などの絵のある磁器碗、527は内面底部に染付けのある陶器の灰釉皿、528は陶器の灰釉大皿で、内面底部に黒色釉による絵か文字が描かれている。529は陶器の灰釉碗で、内面底部にコバルト色釉の花文がみられる。530は内・外面に鉄釉の施された陶器の鉢、532は陶器の瓶蓋で、志野釉に近い施釉に褐色釉の施文がみられる。532は陶器の茶瓶で、外面鉄釉に白色の浮き彫り文様がみられる。533は陶器の蓋で、外面天井部に把手が付けられている。

(16) 09Cf区包含層など出土の土器・陶磁器(図41-534～538)

古代から近世のものまでである。534は須恵器の盤で、比較的しっかりした高台が付く。535は青磁の碗で、口縁部が横ナデにより、やや稜をもつ

て反外する。536は古瀬戸陶器の灰釉卸皿で、内面に線刻の卸目がみられる。537は近世後期の焙烙鍋で、内耳がある。538は瓦質土器の火舎と思われるもので、内外面に横ミガキ調整がみられる。

2. 土製品

(1) 土鍾(図42-539～562)

ナデ調整のみで成形され、中程がややふくらむ筒状形態の土製品で、中世後半期の09A区005SKや056SK、018SE、020SKの遺構から出土するものがあり、他の資料もこれらの遺構周辺の包含層から出土している。孔径から径0.4cm～0.6cmの539～546、径0.7cm～0.8cmの547～551、径が1.0cm以上の552～562に分けられる。興味深いことに、540が出土した09A区005SKとその周辺から出土した540・543・548などは孔径が細いタイプのものが多く、09A区018SEから出土した553～556とその周辺から出土したものは孔径が太いものが多い傾向がある。

(2) 陶丸(図43-563～568)

土鍾 (E539 ~ E562)

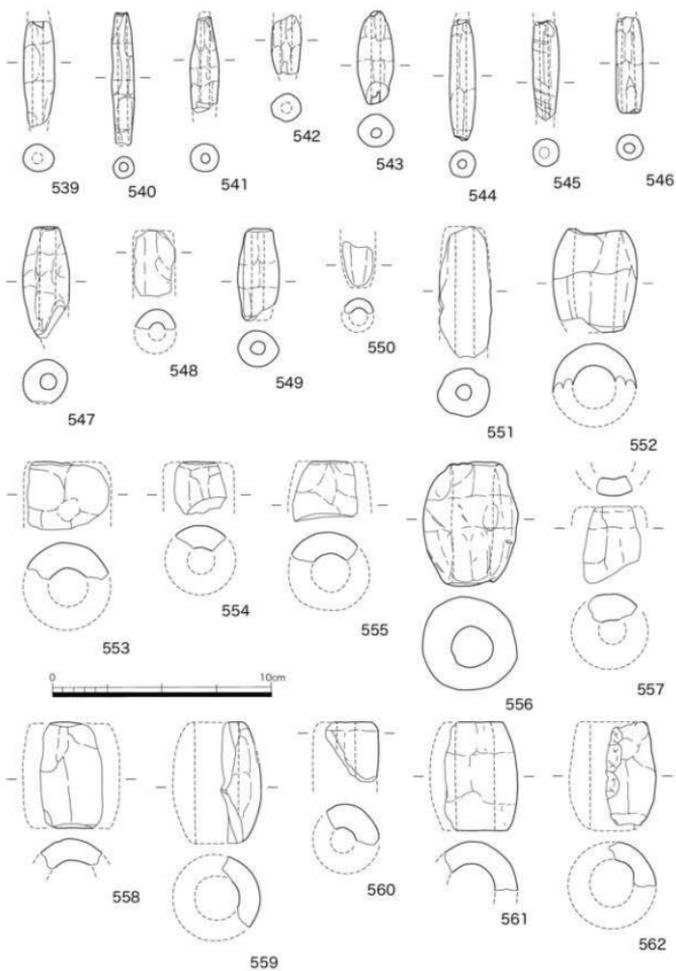


図42 土鍾 (1/2)

日置本郷B遺跡

陶丸 (E563～E568)

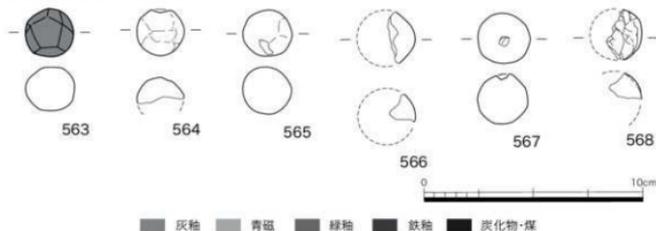


図43 陶丸 (1/2)

ナデ調整のみで作られた南部系陶器と思われる球形の土製品で、径2.2cm～2.7cm程のものである。563は自然軸がかかっている。

(3) 加工円盤 (図44-569～590)

土師器、陶器と磁器を円形に加工したもので、主に中世から近代にかけてのものがある。円形に打撃して加工した破面を残すものが多いが、575・587破面が少しあるいは部分的に研磨されているものと、579・589のように破面が全体的に研磨されているものがある。586が須恵器の甕の底部と思われるもの、576・590が土師器の破片、575が灰釉陶器の碗片と思われるもの、569～573・581が南部系陶器の破片で、569～572は山茶碗の底部付近の破片、585が近代の磁器の碗片を利用したものである。その他は常滑産の破片を利用したものが多いようである。大きさから径1.7cm～2.7cmの小型のもの569～580、径3.0cm～4.3cmの中型のもの581～588、径6.0cm前後の大型のもの589・590に分けられ、小型のものに中世前半期のものが多く、中型～大型のものは近世後期以後のものが多い傾向がある。

3. 金属製品

(1) 銅銭 (図45-M01～M22)

銅銭は、09A区O15SKとO15SKに隣接する地点において、22点がまとまって出土しており、中世の墓への埋納に関連するものと考えられる。銅銭は径2.4cm～2.5cm程で、文字が判読できるものは、嘉泰通寶がM1、元豊通寶

がM04・M12・M13・M22、大観通寶がM07～M09、開元通寶がM15・M18、熙寧元寶がM16・M17、乾元重寶がM21である。

(2) 鉄製品など (図46-M23～M46)

鉄製品で残存状態の良いものを24点図化した。M23・M24・M28は断面の形状などから刀子と思われるもので、M23は刃先が欠損している。M25は板状の不明品、M26扁平含鉄遺物、M27は断面扁平な棒状含鉄遺物、M29～M43は釘と思われるもので、M43には木材の痕跡が付着している。M40とM41はほぼ直角に曲がっている。M44は断面台形状の扁平含鉄遺物、M45も断面台形状の棒状含鉄遺物、M46は断面円形に近い棒状含鉄遺物である。

(3) 鍛冶関連資料・銅滴 (図47-M47～M53)

M47～M53は鍛冶関連資料で、鍛冶工程が付近で行われたことを示すものである。M47は鑪の羽口で、孔径1.5cmである。M48～M53は鉄滓で、M48・M49が4分の1分割椀型滓、M50・M52はガラス質が軽い流動滓Bで、M50が重さ0.6g、M52には石材が付着しており、羽口に近い位置で形成されたものと思われる。M51・M53は椀型滓で、M51は幅2.5cm、厚み2.0cmの細長い形状のもの、M53は常滑産の体部片に付着しているもので、長径14.8cm、短径10.4cm、厚み4.4cmをはかる大型のものである。M54は銅滴で、長径2.8cm、厚み2.9cmのもの、鋳銅・銅細工の加工が付近で行われた可能性がある。

加工円盤 (E569 ~ E590)

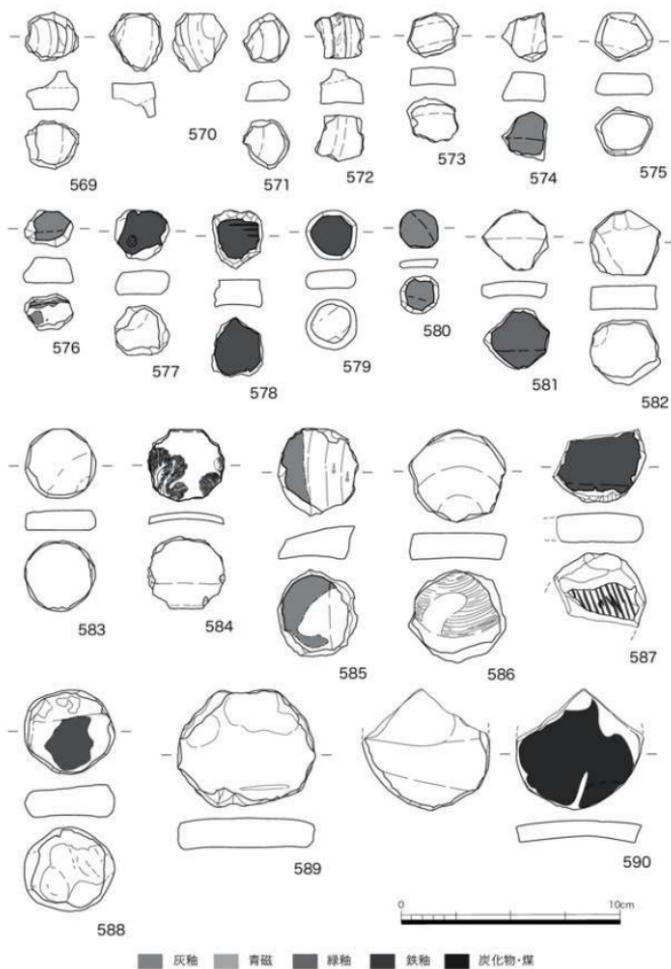


図44 加工円盤 (1/2)

日置本郷B遺跡

銅銭 (M01～M22)

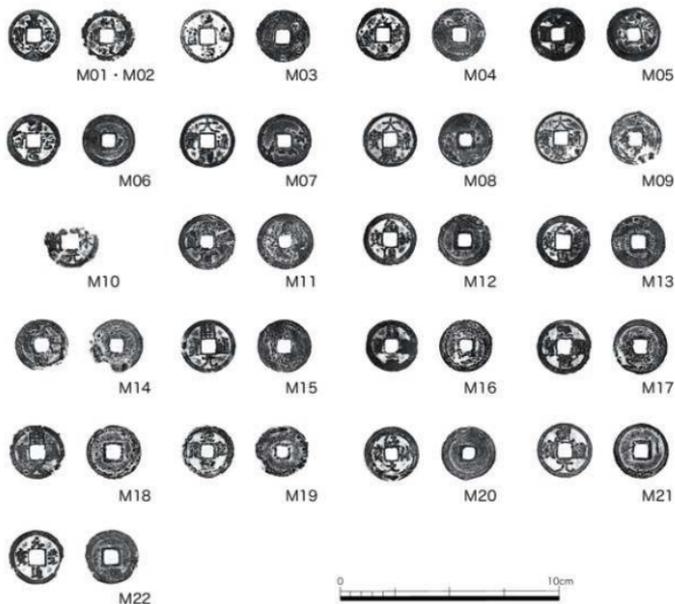


図45 銅銭 (1/2)

4. 石製品 (図48-S01～S15)

石製品には砥石11点、火打石3点、洗濯石1点がある。S01～S11は砥石で、S01が泥岩の他は砂岩～凝灰岩を利用したもので、S08・S10が典型的な楕円形をしており、その他も破片になるまで使用されて研ぎ痕が残されている。S07・S10・S11に煤の付着や被熱痕がみられる。S03には研ぎ面に、機能は不明であるが、5個の小穴がある。S12～S14は火打石と思われるチャート製の剥片で、S12には使用痕らしき溝れがみられるが、S13・S14は使用痕が不明瞭である。S15は軽石のやや扁平な垂円礫で、洗濯のような機能を推定した。

5. 木製品 (図49-W01～W05)

木製品として出土しているものは、09A区O18SEの中で検出された井戸材で、板材15点程と角材1点を採集することができた。樹種は10点分析し、板材がコウヤマキ7点、ヒノキ2点、角材1点がコウヤマキに樹種同定されている。W01はコウヤマキ製の柾目の板材で、幅10.0cm、厚み4.0cmであった。W02・W04・W05はコウヤマキ製の板目の板材で、W02・W04・W05は幅6.0cm～8.8cm、厚み1.0cm～1.4cmのものである。M03はコウヤマキ製の角材で、幅4.6cm、厚み4.0cmで、井戸材を支えている支柱であった可能性がある。

鉄製品など (M23～M46)

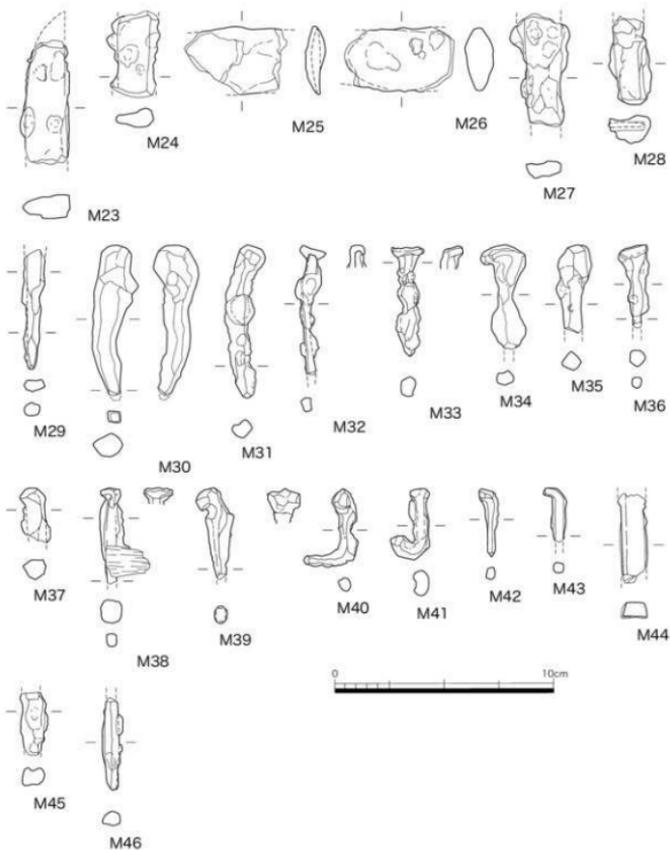


図 46 鉄製品など (1/2)

日置本郷B遺跡

鍛冶関連資料・銅滴 (M47～M54)

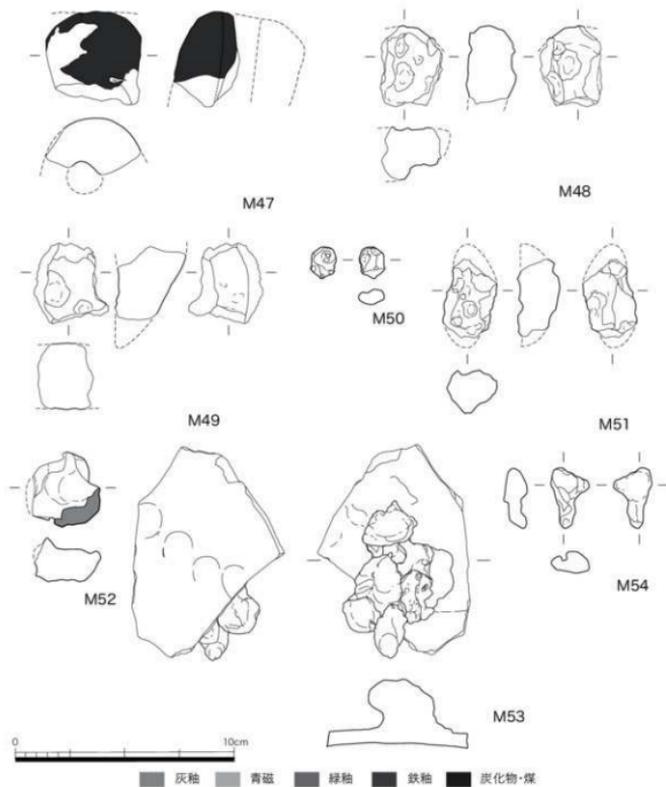


図 47 鍛冶関連資料・銅滴 (1/2)

参考文献

- 齊藤孝正 1995 『須恵器集成図録』第3巻、東日本編1、雄山閣
 赤羽一郎・中野晴久 1995 『中世常滑焼の生産地編年』『常滑焼と中世社会』小学館
 鈴木正貴 1996 『東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜』『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム

- 金子健一 1996 『尾張・三河地方のホウロク』『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
 東海土器研究会編 2000 『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』第1回東海土器研究会
 藤澤良祐 2007 『編年表』『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県

石製品 (S01 ~ S15)

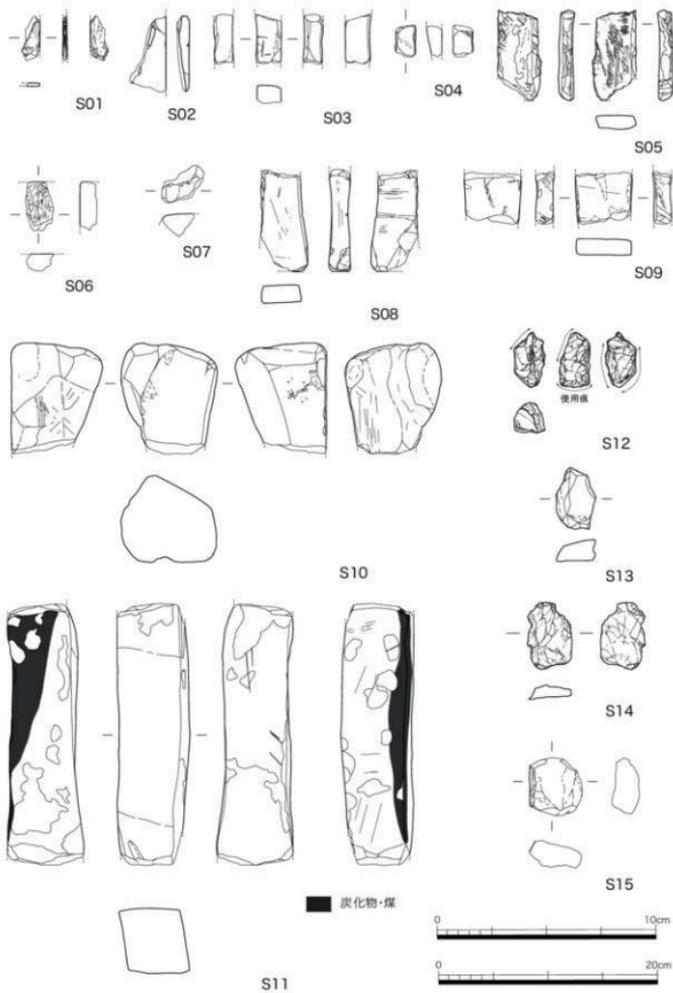


図48 石製品 (S01 ~ S09・S12 ~ S15は1/2、S10・S11は1/4)

日置本郷B遺跡

木製品 (W01 ~ W05)

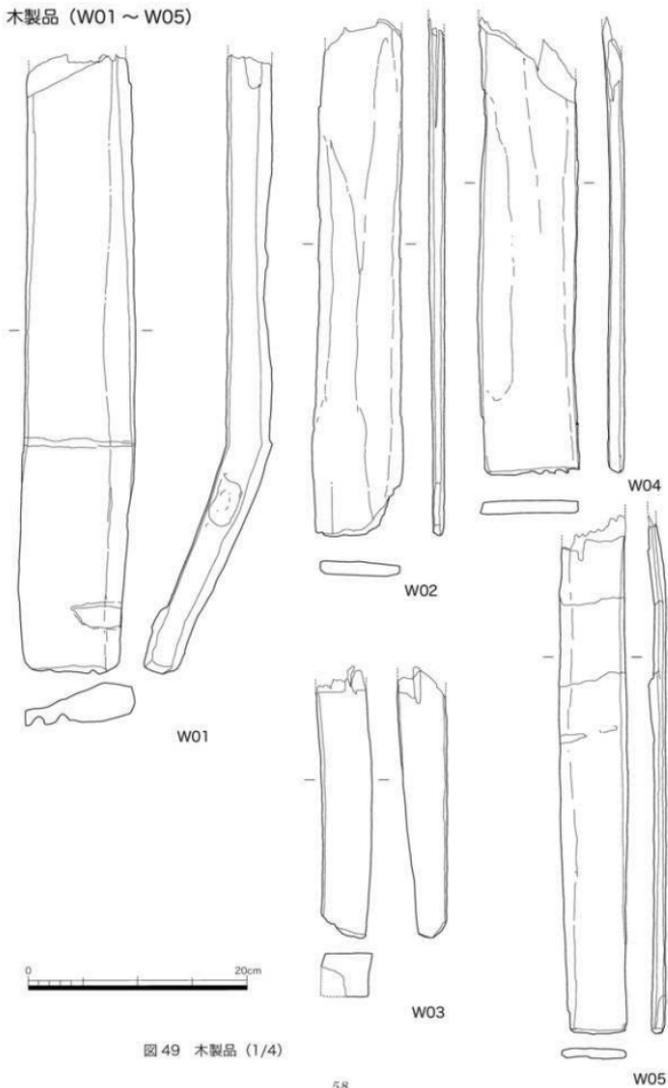


図 49 木製品 (1/4)

第4章 自然科学分析

A. 日置本郷 B 遺跡の動物遺体同定

中村 賢太郎 (パレオ・ラゴ)

1. はじめに

日置本郷 B 遺跡は愛西市日置町本郷に所在し、木曾川の支流によって形成された砂堆微高地上に立地する。日置本郷 B 遺跡の発掘調査では奈良、平安、鎌倉、室町時代などの遺構や遺物が検出されている。ここでは、A 区の方形土坑とその周辺から出土した骨片および B 区と C 区の貝層出土の動物遺体について報告する。

小型の脊椎動物の同定にあたっては、早稲田大学の樋泉岳二先生にご教示をいただいた。

2. 試料と方法

A 区の方形土坑 005SK (グリッド 7D7m) と 005SK 周辺 (グリッド 7D6m) から出土した骨片は現場で採取された。試料数は、005SK では Dot.001 ~ 005、007 ~ 010 の 9 点、005SK 周辺では 1 点、計 10 点である。

貝層の試料は Ca 区 1 点、Bc 区 2 点、Bb 区 4 点、計 7 点である。No.1 は Ca 区の貝層④、No.2 は Bc 区の貝層①と 001SK、No.3 は Bc 区の貝層② (002SK)、No.4 は Bb 区の貝層③下位、No.5 は Bb 区の貝層③最下位、No.6 は Bb 区の貝層③上

位、No.7 は Bb 区の貝層③下位から採取された。貝層の試料については、水洗選別を行い、篩により 1mm 以上の動物遺体を回収した。さらに 1mm 以上の動物遺体を篩により 1mm 以上 5mm 未満と 5mm 以上とに分離した。貝類のうち二枚貝は 5mm 以上で殻頂が残るもの、巻貝は 1mm 以上で殻軸が 2 巻以上残るものを同定と計数の対象とした。甲殻類は 5mm 以上、魚類、爬虫類、両生類、哺乳類は 1mm 以上の試料を同定と計数の対象とした。

同定と計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。

3. 結果

方形土坑 005SK と 005SK 周辺から出土した骨片は比較的大型の哺乳類と見られる。しかし、いずれも小片であり、部位と種が分かる破片は無かった。色調を見ると黄褐色や白色の破片があった。白色の破片は火を受けている可能性がある。

貝層の動物遺体は貝類が多くを占め、その他に甲殻類、爬虫類、両生類、魚類、哺乳類が少量見られた。貝類では、マガキ、ハマグリ、ヤマトシ

表2 貝類と甲殻類一覧

No.	地区	層位	試料量(kg)	マガキ		ハマグリ		ヤマトシジミ		オキシジミ		シオフキ		不明二枚貝	カワニナ	カワニナ幼貝?	オオタニシ	マイマイ類	微小巻貝	フジツボ類
				左	右	左	右	左	右	左	右	左右一括								
1	09Ca	貝層④	10.3			51	48	5	4											5
2	09Bc	貝層①と001SK	9.7	+		20	30	18	18		1	1		4				8		30
3	09Bc	貝層②(002SK)	13.7	172	80	80	69	87	116					2						5
4	09Bb	貝層③下位	14.7	210	227	34	21	74	57				2		1			4	26	+
5	09Bb	貝層③最下位	14.7	136	63	25	34	13	13					1		1	1	1	3	+
6	09Bb	貝層③上位	16.6	21	15	42	34	55	63	1				23		1	5		6	
7	09Bb	貝層③下位	18.1	138	156	20	33	100	83					3						13

+は破片あり、計数せず

4と7はマガキ類の右殻各1点含む

表3 爬虫類、両生類、魚類、哺乳類一覧

No.	地区	層位	分類群	部位	左右	部分・状態	数量
3	09Bc	貝層②(002SK)	カエル類	椎骨	—	完存	1
			カエル類?	椎骨	—	ほぼ完存	1
			ニシン科	椎骨	—	ほぼ完存	3
			哺乳類(小型)	指骨	不明	完存	1
			ネズミ類	大腿骨	右	近位端	1
4	09Bb	貝層③下位	サバ科?	方骨	右	破片	1
			ネズミ類?	四肢骨	不明	骨幹	1
6	09Bb	貝層③上位	ヘビ類	椎骨	—	ほぼ完存	5
			カエル類	四肢骨	不明	骨幹	1
			ニシン科	椎骨	—	椎体	2
			ウナギ属	椎骨	—	完存	1
			コナ科	椎骨	—	破片	1
7	09Bb	貝層③下位	アジ科	椎骨	—	完存	1
			ネズミ類	大腿骨	右	近位端	1
			食肉目	末節骨	不明	破片	1

ジミが多く見られた。他にオキシジミ、シオフキ、カワニナ、オオタニシ、マイマイ類、陸産と思われる微小な巻貝が見られた。Bb区とBc区の貝層(No.2～7)ではマガキ、ハマグリ、ヤマトシジミが多いが、Ca区の貝層(No.1)ではハマグリが多い点でB区と共通するが、マガキが無く、ヤマトシジミが少ないという点で異なっていた。なお、No.4と7はマガキの椎貝の右殻を各1点含んでいた。甲殻類ではフジツボ類の破片がNo.3～5、7で見られた。貝層から出土した爬虫類、両生類、魚類、哺乳類は表2に示したとおりである。爬虫類ではヘビ類、両生類ではカエル類、魚類ではニシン科、アジ科、コナ科、サバ科?、ウナギ属、哺乳類ではネズミ類、食肉目が見られた。

4. 考察

Ca区の貝層(No.1)では、内湾に生息するハマグリが多く、汽水域に生息するヤマトシジミが見られ、内湾から河口にかけての水域で貝類の採取が行われ食用にされたと考えられる。

Bc区およびBb区の貝層(No.2～7)では内湾に生息するマガキ、ハマグリ、汽水域に生息す

るヤマトシジミが多く、内湾から河口にかけての水域で貝類の採取が盛んに行われ食用にされたと考えられる。また、カワニナやオオタニシが見られることから淡水域での貝類の採取も行われたと考えられる。また、フジツボ類はNo.3～5、7に見られるが、これらの試料ではマガキも多いことから、フジツボ類はマガキに付着して持ち込まれたものである可能性が高い。

魚類では、海域に生息するニシン科、アジ科、コナ科、淡水域に生息するウナギ属が見られたことから、海域や淡水域で魚類が採取され食用にされたと考えられる。

ヘビ類、カエル類、ネズミ類についてはヒトにより利用されたかどうか不明である。食肉目はおそらくヒトにより利用されたと考えられる。

A. 日置本郷 B 遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子 (バレオ・ラボ)

1. はじめに

日置本郷 B 遺跡は愛西市日置町本郷に所在し、木曾川の支流によって形成された砂堆微高地上に立地する。ここでは、鎌倉～室町時代の井戸材の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、調査区 09A の 018SK 下層から出土した井戸材 10 点である。剃刀を用いて試料の 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラルで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のコウヤマキとヒノキの 2 分類群が確認された。木取りは柾目と角材もあるが、板目が最も多い。結果の一覧を表 1 に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 図版 1 1a-1c(No.1)、2a-2c(No.3)

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は単列で 1～15 細胞高であるが、一般に 5～6 細胞高以下で低い。分野壁孔は窓状である。

コウヤマキは福島県以南の温帯から暖帯部に生育する常緑針葉高木である。耐朽性・耐湿

性が強く、強靱である。

(2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版 1 3a-3c(No.8)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で 1 分野に 2 個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く狂いが少ない。

4. まとめ

コウヤマキ、ヒノキともに山地に生育する常緑高木である。本遺跡は低地に立地するため、近隣の山地から持ち込まれた材である可能性が高い。また、材質は両者とも耐朽性・耐湿性に優れており、木理直通で割裂性が大きいため、加工も容易である。特にコウヤマキは耐水性に極めて強いので、長期間水湿にさらされても腐りにくく、棺や柱材など土中での利用や、桶類など水場での利用が多くみられる（伊東・佐野他、2011）。本遺跡の井戸枠への樹種利用傾向も、水場での利用に適した材質を選択利用した結果と思われる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和徳 (2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社。

表 4 樹種同定結果一覧

試料番号	調査区	グリッド	遺構	樹種	木取り
1	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	柾目
2	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
3	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	角材
4	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
5	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
6	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
7	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
8	09A	7D13n	018SK下層	ヒノキ	板目
9	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
10	09A	7D13n	018SK下層	ヒノキ	板目

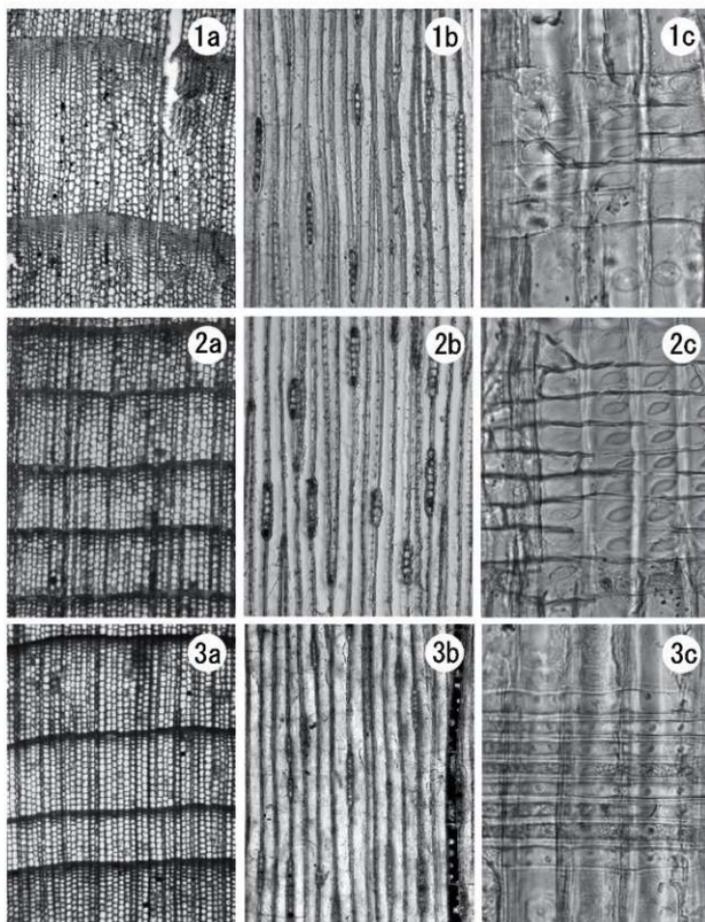


図 50 日置本郷 B 遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c. コウヤマキ (No1)、2a-2c. コウヤマキ (No3)、3a-3c. ヒノキ (No8)

a: 横断面 (スケール=500 μ m)、b: 接線断面 (スケール=200 μ m)、c: 放射断面 (スケール=50 μ m)

第5章 総括

最後に、遺構と遺物の報告についてまとめたい。

1. 遺構の変遷 (図 51)

今回の調査区の地形は、09Ab区から09Ac区付近と09Ba区から09Bc区付近に遺跡基盤層の高まりがみられ、古代から中世の遺構群が確認された。09Ab区から09Ac区付近を挟んで、北側の09Aa区において、古代からつづき中世後半期に埋没していく自然流路002NRが北東から南西方向に流れ、南側の09Ad区では古代から近世に存在した谷地形の096NRが東西方向にはしる。この096NRの南にある09Ba区～09Bc区において古代から中世の遺構が認められる。そして、南にある09Ca区から09Cf区にかけて北から南に緩やかに低くなる地形が想定され、古代から近世の遺物が出土している。

遺構の変遷については、古代の可能性のある遺構が09Aa区の南側から09Ac区と09Bc区においてある。特に09Ac区において柱の沈み込みを防ぐ機能をもつ根石がみられる柱穴025SKと049SKがみられ、建物や柵列の跡の可能性があり、今回の調査区における中心的施設と思われる。また09Ab区の059SK、067SK、069SK付近にも古代の可能性のある遺構が分布する。また09Bc区において平安時代前半の時期が推定できる002SKがみられ、内湾に生息するマガキ・ハマグリと汽水域に生息するヤマトシジミなどの貝類が出土したのは、09A区ほぼ全域において出土した製塩土器の存在とともに本遺跡の営みの特徴づけるものと思われる。

中世前半期は、遺物は比較的多数出土するが、宋銭が出土した09Ab区014SK・015SK、073SK、09Ac区043SKがあるのみである。09Ab区014SK・015SKは墓坑の可能性が高く、銅銭の出土位置からは中世後半期の可能性もある。

中世後半期は多数の遺物が出土しており、多数

の遺構が確認された。特徴的な遺構としては、北側の09Aa区002NRの南側では、大型は乳類の骨が出土した005SKと同様な形態の003SKがみつかり、この部分に中世前半期からつづく墓域が推定できる。次に09Ab区では095SBが確認されており、付近に056SK、060SK、068SK、074SK、075SD、082SKがあり、多数の遺構変遷が想定され、その南側に中世後半期に埋没する09Ac区018SE、044SK、046SK、047SKがみられる。この遺構群の南側に北北東から南南西にのびる区画溝041SDと035SDが二条平行して確認され、溝で区画された西側が遺跡の生活域の中心部分と想定される。そして溝の東側においても09Ac区019SK、020SK、029SK、030SKがみられ、生活域の区画が存在したものである。この中で16世紀にかかる大室期の遺構と考えられるのは018SEと074SKである。

続く16世紀後半から江戸時代前半の遺構・遺物はほとんどなく、近世の遺構・遺物が確認できるのは18世紀後半のものである。北より09Aa区001NRが近世まで流路として残り、その南に09Ab区054SKがみられる。また南側ではほぼ埋まりかけた096NRの北側肩部で017SDが、南側縁辺部にて094SDが掘削されている。

2. 遺物の出土分布傾向 (図 52)

本遺跡の出土遺物を整理するにあたり、各出土地点毎の遺物の器種毎の点数を大まかにカウントし、グリッド単位にその出土傾向を分析したものが図52である。出土遺物には古代の須恵器から近世の陶磁器や土師器、近代の陶磁器まであり、出土した遺物の主体を占めるのは、古代から中世後半期にかけての遺物であった。また比較的狭い範囲の調査区であった09Ba区～09Bc区、09Ca区～09Cf区においても、出土量の違いはあるものの09A区と同様の種類の遺物が出土していることが特徴である。

日置本郷B遺跡

もう一つの近世陶磁器の出土傾向は、本遺跡における人々の営みが一つや少数の極に集中するのではなく、散在的・均等的に遺物が出土する傾向と同様に、均等化した営みが散在的に行われたことを反映するものと考えられる。

3. 日置本郷B遺跡の特徴

最後に、以上の分析をふまえ、本遺跡の調査から考えられる特徴を述べたい。

遺構は古代から中世後半期までと近世後期のものに主に分かれ、古代から中世後半期の遺構は大室期にかかる16世紀前半まで確認できる。古代～中世後半期の中では、中世後半期の遺構が多く、この時期には多くの変遷が推定できる。その遺構分布は中世後半期において09Ab区から09Ac区を中心に多数存在し、周辺にかけて少なくなる。この傾向は遺構が少ないものの、古代や中世前半の遺構にも窺われ、出土遺物の分布傾向からも同様な結果を得ることができ、中世後半期の遺跡の終末期である大室期の陶器の分布にはよりこの傾向が強くみられる。そして近世の陶磁器が均等で散在して出土する傾向は、ほぼ09A区に散在して分布する近世の遺構とも対応する。

では、このような古代から中世後半期と近世後期の遺構・出土遺物の分布傾向の違いが起こる要因は、何であろうか。まず考えられるのは、古代から中世後半期の遺構・出土遺物の分布傾向が、古代から中世後半期にかけて存在する09Aa区002NRと09Ad区096NRにみられる遺跡の自然地形の起伏から強い影響を受けて起こる現象と考えられる点である。反対に近世後期の遺構・出土遺物の分布傾向は、中世後半まで存在した自然流路が埋没し、溝などの掘削により、人為的開発が進んだ結果、自然地形の起伏からの影響が少なくなった、あるいは自然地形の起伏を利用した土地利用が進んだものと考えられまいであろうか。

よって、当遺跡の中心となる古代～中世後半期の人々の営みは、遺跡の調査で見つかった自然流路などに見られる自然地形の起伏に強い影響を受ける営みが推定され、その影響を考える一つとし

て、遺跡から発見された内湾から汽水域に生息する貝殻の存在が指摘できる。つまり本遺跡が貝類利用にみられる汽水域に近くあり、遺跡の遺構面がマイナス1.8m付近であることから(註1)、比較的地下水位が高いために、自然地形にみられる起伏から強い影響をうける環境におかれていたものと考えておきたい。

(註)

註1 加藤 秋1996「第七章 現代」『佐屋町史』佐屋町史編纂委員会によると、現在の日置八幡宮の南側に位置する水準点について、昭和47年11月の標高は-0.930mとなっており、その後平成5年11月までに同地点の水準点は0.3926m地盤沈下が進んで標高-1.3226mとなり、現在の都市計画図上に記載された標高は-1.30mと表示されている。また、『佐屋町史』第七章 現代に示される図56地盤高図(昭和35年3月結果)によると、愛西市日置町の日置八幡宮付近の標高は標高0mより高く、標高0.5mよりは低い範囲にあたり、標高0.2m～0.3m前後であった可能性が高い。本センターが発掘調査を実施した平成21年12月の記録では、調査区の地表面上面の標高は-1.0m～-1.1m前後にある。よって、昭和35年3月時点の標高より-1.3m前後、地盤沈下している可能性が高く、尾張地域の工場用・建築物用井戸の掘削が盛んとなる大正期より古い時代に比べると、標高が-1.5m以上は低下しているものと考えられる。